広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	小学校英語教育の未来 ： 現状と今後のあるべき姿を考える〈シンポジウム〉
Auther(s)	柳瀬，陽介；朝倉，淳；本岡，寛；大津，由紀雄；難波，博孝
Citation	初等教育カリキュラム研究 ，5 ： 81 - 116
Issue Date	2017-03-31
DOI	
Self DOI	10.15027/42793
URL	http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00042793
Right	Copyright (c) 2017 初等教育カリキュラム学会
Relation	

シンポジウム

小学校英語教育の未来：現状と今後のあるべき姿を考える

【問題提起】

小学校での言語教育を考える―英語教育導入の流れの中で―

大津　由紀雄（明海大学外国語学部　教授，慶應義塾大学　名誉教授）

【シンポジウム】

シンポジスト

柳瀬　陽介（広島大学大学院教育学研究科　教授）

朝倉　淳（広島大学大学院教育学研究科　教授・広島大学附属東雲小学校長）

本岡　寛（東広島市立東西条小学校教諭）

指定討論者

大津　由紀雄（明海大学外国語学部　教授，慶應義塾大学　名誉教授）

司会

難波　博孝（広島大学大学院教育学研究科　教授）

実施日：平成 28 年 1 月 9 日（土）13：00 ～ 16：30
場所：広島大学大学院教育学研究科（広島大学東広島キャンパス）K 棟 102 号室
主催：広島大学大学院教育学研究科初等カリキュラム開発講座・学習開発学講座

★司会者（難波）

本日は，表題にあります小学校英語教育の未来，今とこれからをどうすればいいのかということについて，4 人の方にお話をしていただきます。将来，小学校において，英語教育あるいは外国語教育がどんなふうになるのか。まだ混沌としているところもありますし，英語教育導入に関しては大賛成派から大反対派までまだ議論が続いているところですが，しかしながら，現場のほうでは既に外国語活動が行われ，進んでいるところもあります。そこでまた大きな課題も抱えているという状況です。そこで，広島大学のリサーチ・オフィスというところから助成をいただきまして，こういったシンポジウムを開くことになりました。

ここからは小学校英語教育についてお話をしていただく方をご紹介したいと思います。最初に，問題提起をしていただきます明海大学の副学長で慶應義塾大学名誉教授の大津由紀雄先生です。

★大津

どうぞよろしくお願いします（拍手）。

★司会者

大津先生はもう皆さんよくご存じ。最近，英語教育に関してたくさん発言をされていらっしゃいます。

続きましてシンポジウム。その後，シンポジストのほうで意見を表明していただくのですが，まずトップバッターとして，広島大学大学院の柳瀬陽介先生です。

★柳瀬

よろしくお願いします（拍手）。

★司会者

柳瀬先生は，何といったらいいのか私はよくわ

からないのですが，哲学や言語学や心理学など非常に幅広い興味をお持ちで，しかし，教育の本質をいつも考えておられる方だなと思っております。以前から広島大学では親しくお話をしていただく機会を得，また，私は彼のアドバイザーでもありますので，食生活も気にかけているという方でございます（笑声）。2番目は，同じく広島大学大学院の朝倉先生です。

★朝倉

こんにちは（拍手）。

★司会者

朝倉先生は，私と同じ初等カリキュラム開発講座の先生で，生活科教育，そして，今は附属東雲小学校の校長先生でいらっしゃいます。朝倉先生は，英語教育と文脈というよりは，小学校教育の現場に実際に出て先生たちとかかわっておられる立場から，また，生活科，子どもの学びの経験や子ども自身の経験といった観点からいろんな話が聞けるのではないかと思っております。

そして最後ですが，今，到着されました本岡先生です。東広島市立東西条小学校の先生でございます。

★本岡

こんにちは（拍手）。

★司会者

本岡先生には，実際に今，小学校で英語教育を進められておられる東西条小学校での実践，また，その中での成果と課題についてお話をしていただきたいと考えています。

今日の流れなのですが，最初に大津先生から問題提起をしていただきまして，シンポジストとして，3人の先生方にお話をしていただきます。その後休憩をいただいて，後半は，まず大津先生から各シンポジストに対してのコメント，また，それに対する応答の後，フロアとの対話ということになっております。

それでは早速，大津先生から問題提起をしていただきたいと思いますので，よろしくお願いいたします。

★大津

ご紹介いただきました大津です。今日は，「小学校での言語教育を考える－英語教育導入の流れの中で」というテーマで話をさせていただくのですけれども，先ほどの難波さんからのご紹介に絡んで1つはっきりとお断りしておきたいことがあります。「小学校英語教育の未来」が今回の全体のテーマですが，それは《小学校英語教育に未来がある》というのが前提になっています。しかし，私は，このまま進んでいくのであれば小学校英語教育に未来などないと考えています。

これまで，私自身，小学校英語に関していろいろなかかわりをもってきたのですけれども，個人的にざっと振り返ってみましょう。

ここ10年，20年というところでみますと，小学校英語の動きの根本にあるのは何が何でも小学校に英語を導入するという信念ともいえるような強い思い込みで，そこに何かきちんとした理念のようなものがあったというわけではない，という点をまず押さえておきたいと思います。

しかし，そうはいうものの，特段の理由なしに小学校に英語を導入するというわけにはいかないわけで，そこで引き合いに出されたのが，《効果の上がらなかった従来の英語教育》というスローガンです。「効果が上がらなかった」というのは，中学校，高等学校，場合によっては大学まで6年間ないしは10年間英語を学校で学ぶのだけれども，一向に英語が使えるようにならない，というおなじみの認識です。「使えるようにならない」と今言いましたけれども，普通は「話せるようにならない」と言われます。6年間，10年間やっても一向に英語が話せるようにならない。ちっとも効果が上がらないのではないかという指摘です。

そんな状況下で，《これからの学校英語教育が目指さなくてはいけないのはグローバル志向の英語教育である》ということが言われ始めました。ここでいっている「グローバル志向の英語教育」というのは，おおよそ，こんなことです。グローバル化が進んでいって，その中で活躍できるような「人材」（いやなことばですね）を育成することが大切で，そのためには，英語が使えなくては始ま

らない。そういう期待に応えられる英語教育ということです。

そこでしばしば引き合いに出されたのが，《外国語の学習というのは早く始めたほうが効果的である》という考え方です。これは，一般的には「外国語学習の臨界期仮説」と呼ばれているものです。「臨界期仮説」というのは，おおざっぱに言えば，何かを身につけるときに，適齢期のようなものがあって，その適齢期の間にその力を身につける機会があるとものになるのだけれども，それを過ぎてしまうとなかなかうまくいかないか，あるいは全くものにならないといった考え方です。これは，ことばに関していえば，もともと母語（第一言語）の獲得について，もう半世紀前以上前にいわれ始めた考え方です。

母語の獲得の臨界期についてはある程度の根拠もあるのですけれども，ここで気をつけていただきたいのは，今私たちが考えようとしているのは，外国語として英語を学ぶという文脈で，であるという点です。外国語の学習についても臨界期があるかどうかということについては，今のところ，全くはっきりしない。臨界期があるという根拠についてはないと断言しても差し支えないかと思います。実際，一口に，「外国語の学習」と言ってもさまざまな様態があるのですから，すべてをひっくるめて「外国語の学習の臨界期」などとは尋常な人であればとても言いだすことはできません。

しかし，臨界期というものが，母語の獲得だけでなくて，外国語の学習にもあるらしい，というようなことがまことしやかにささやかれ，確固たる理念などはないのにもかかわらず，中学校からでは遅すぎる，英語の学習はもっと早くから始めたほうがいい，つまり，小学校から英語の教育を始めたほうがいいという流れが確実なものになっていきました。ちなみに，こういった流れの形成を主導したのは，学校教育界—文科省も含めてですけれども—というよりも，むしろ経済界，教育産業界など，外部の力であったように思います。そうそう，その流れに勢いを与えたのは「世間」であることも忘れないようにする必要があります。

比較的最近の流れをみますと，英語教育に関するさまざまな動きは文部科学省が主導しているというよりも，むしろ官邸とか与党，具体的には教育再生実行本部や教育再生実行会議といったものが主導しているという感を受けます。2013年の暮れだったかと思いますが，「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」というものが発表されました。発表したのは文科省ですけれども，そのもとにある考え方は教育再生実行会議と教育再生実行本部が肉づけしたものです。

この「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」は今でもネット上で閲覧することができます。その中に，小学校英語について「活動型」，つまり，英語活動を中学年で，そして，「教科型」，つまり，教科としての英語を高学年に導入するということが書いてあります。発表は文科省ですけれども，こうした考えは官邸，与党が主導して形成された実施計画です。実際，この実施計画が導入されようとしたときには，文科省の中でもかなりの動揺があったように聞き及んでいます。

以上が小学校英語に関する比較的最近の動きについての私の認識です。冒頭にも申し上げたように，私はこういう流れに乗っていたのでは，間違いなく小学校英語についての未来はないだろうと考えています。私が言い続けていることは，活動型にせよ，教科型にせよ，小学校英語という閉じた世界からの発想で物を考えている限りにはそこには未来がないということです。もう少し言えば，小学校教育という視点，学校英語教育という視点，言語教育という視点が欠けていては，いずれ破綻してしまう危険性がかなり高いだろうということです。そのように考えるときに，本質的な問題は，小学校英語用に訓練を受けた教員が不足しているというような現実的な問題，もちろんこれもあるのですけれども，それは問題の本質ではなくて，本質は，むしろ理解，思考，判断，発話の基盤になる母語の力を育成するということを出発点としていない。母語の力というものの認識が十分になされていないというところにあると考えます。

これは1つ小学校英語だけに限ったことではなくて，中学校，高等学校，大学における英語教育についてもほぼ同じようなことがいえるので，そ

れについて，世には４人組といわれていますけれども，斎藤兆史さん，江利川春雄さん，鳥飼玖美子さんと私で数年前に『英語教育，迫り来る破綻』（ひつじ書房，2013年）という本を出しました。そこに書いたことは本質的には今でも十分通用することだと思っていますので，関心のある方はぜひご覧ください。

ここで，言語教育に関する私の基本的な考え方を述べておくことにしましょう。私は，言語教育とは思考を支えることばの力を最大限に発揮できるよう，学習者に対して支援を行う教育的な営みであると考えています。大切なところは，「思考を支えることばの力」という部分です。気をつけていただきたいのは，「ことば」という言い方をしていて，英語とか日本語とかといった個別の言語の問題を取り上げているのではないという点です。こういう教育的な営みを行うことによって，究極的には母語を効果的に使うことができるようになる。もう少し言えば，相手の考えを明確にとらえ，思考し，自分の考えを的確に相手に伝えることができるようになることを目指す。これが，私が考えている言語教育の本来的な形です。

お気づきになった方も多いかと思いますけれども，「母語」と言っていますので，例えば，外国語を学習するということも，究極的には母語の力を十分に生かすことができるようになるための教育的な営みの一環だと考えています。もしこの点を前提とするのであれば，母語教育としての国語教育と，外国語教育としての英語教育を一体化することは必然的なものとして求められることになります。

なお，今，「外国語教育としての英語教育」と言いましたけれども，本来は英語教育に限定されたものではありません。ただ，現実に照らして，簡単に「外国語教育としての英語教育」という言い方をしました。

「母語」ということばを今まで何度か使いましたけれども，理解にずれがあるといけませんので，一応簡単に規定しておきたいと思います。「簡単に」といったのは，先ほど申し上げた認知科学の観点からいくと，実は母語の規定というのはとても難しくて，ここでするように簡単に済ませるわけにはいかないのですけれども，少なくとも言語教育という文脈で考えるときには，これから述べる程度の理解で十分だと思います。その規定ですが，「生まれてから一定期間触れていることによって自然に身についた言語」，これが母語です。この「母語」の規定の中には，国とか国家というような概念は出てきませんので，「母国語」という概念とははっきりと区別する必要があることもあわせてご注意ください。「触れている」と書いたのは，音声言語の場合は「耳にしている」，手話の場合には「目にしている」ということになります。母語は，赤ちゃんが生まれて最初に身につけることばですので，時として「第一言語」と呼ばれることもあります。

その母語について気をつけておきたい点があります。母語の獲得，つまり，母語を身につけるという過程も，母語を使用する過程，理解とか発話，その過程もほぼ無意識に行われるので，一般的には母語は無料（ただ）（つまり，特段の努力をなくても手に入り，自由に使うことができる）であるという思い込みが生まれやすい。ここ，注意が必要です。この思い込み，つまり，ひとたび人間に生まれてくれば，だれでも問題なく母語を身につけることができ，獲得された母語はだれでも苦労することなく，的確に使うことができるという思い込みですね，これが危険なんです。実際のところはそうではない。ここが今日の話の重要な点の１つで，具体的な例はこれから出していきます。

では，母語の力を十分に発揮させるためには何が必要かというと，まず第１に，相手，つまり，母語の正体を知らなくてはいけません。母語の正体を知ること。中でも，言語表現というのはあいまい性という性質をもっているということに注意する必要があります。具体的な例は幾らでも挙げられますが，１つだけ例を挙げましょう。「渡辺刑事は血まみれになって逃げた犯人を追いかけた」（永野賢による作例）という文は，これは２通りの解釈が可能です。「血まみれになって」というところがミソで，渡辺刑事が血まみれになったのか，それとも犯人が血まみれになったのか，２通りの解釈ができる。

「渡辺刑事は血まみれになって逃げた犯人を追いかけた」は１つの単語の並び，１つの文であるわけですけれども，２通りの解釈を許す。言語表現が持ちうる，こういう性質のことを「あいまい性」といいます。これは日本語からの例ですけれども，自然言語，人間が母語として身につけることができる言語のことですが，どの言語であってもこの性質を持っています。言語表現があいまい性を持ちうるということは伝達，コミュニケーションという文脈で考えると，とても注意が必要です。誤解を生むおそれがあるわけですからね。そこで，ことばというものがあいまい性という性質をもっていることを的確に理解し，そして，それを的確に利用していくことが必要になってきます。

ちなみに，ことばはシステムですので，それが果たす機能，つまり，働きというものがあります。そのときある，ある働きの観点からすると弱点になるけれども，別の働きの観点からすると逆に強みになるということもあります。このあいまい性というのはその一番よい例の１つかと思います。あいまい性があるというのは，渡辺刑事の例文からもわかるように，相手とのやりとりの間で誤解を生む可能性を生むわけですけれども，しかし，今度は文学，あるいはもっと広く芸術という観点からすれば，宮沢賢治の『注文の多い料理店』の例を出すまでもなく，これが逆に強みになることもある，ということです。

ことばについての感覚―私は「ことばへの気づき」といっているですけれども―を磨いて，母語を的確に使えるように訓練するというのはとても重要なことです。先日，東京の地下鉄に乗っていましたらば，大手英会話学校の広告にこんなものがありました。「自分の職業すら英語で話せない自分に気がついた」。だから英語を勉強しようねという話なのですけれども，さあ，皆さんの多くは日本語を母語にしている方だと思うのですが，このキャッチをごらんになって，何かおかしいなとお感じになりましたでしょうかね。

ちょっと伺ってみたいのですけれども，このキャッチをお読みになって，どんな解釈を思い浮かべたでしょうか。自分の職業が仮に弁護士だったとしますね。そのときに，「弁護士」に当たるlawyerという英語の単語を知らなかった，そういう自分に気がついたという解釈した方と，もう１つ，lawyerいう単語は知っているけれども，実際に自分がどんなことをやっているのか，つまり，弁護士の業務としてどんなことをしているのかということを英語で説明ができない，そういう自分に気がついた，と解釈をした方と両方おいでではないかと思います。いかがですか。

―今日はほぼ半分・半分ですね。

ここでちょっと落ち着いて考えていただきたいのですが，もしlawyerという単語を知らなかったらば，私だったらば，「自分の職業を英語で言えない」で，「自分の職業を英語で話せない」とは言わない。だから，さきほどのキャッチの形なら「自分の職業すら英語で言えない自分に気がついた」となる。一方，自分の仕事の内容を英語で説明できないということなら，「自分の職業を英語で話せない」ではなくて，「自分の職業について英語で話せない」となるはずです。さきほどのキャッチの形にするなら「自分の職業についてすら英語で言えない自分に気がついた」となるはずです。だから，元々のキャッチはおかしい。

もう１つ最近気がついた例を出しましょう。育児書なのですけれども，その副題が「育児困難な子どものための育児学」（笑声）。やっぱり笑ってくださった。おかしいですよね。副題なのですけれども。著者も著者だと思うのですけれども，編集者が問題ですね。編集者がこれはおかしいと指摘するのが当然だと思うのですけれどもね。同じ本の解説文には「緘黙・多動など，育児に不安を覚える子どものための子育てガイドブック」（笑声）。すごい日本語ですよね。

たまたま最近目についた２つだけ例として挙げたのですけど，こうした妙な日本語を使う人が小学生からおとなまで増えてきているように感じます。今日は新聞社の記者の方もいらっしゃるし，放送局の方もいらっしゃるけれども，最近の新聞とかテレビのニュースでも結構おかしなものがあります。

そういった文脈の中で何が必要かといったらば，

母語の文法，母語の仕組みが一体どんなものなのかをきちんと学んでおくことが必要になるかと思うのです。しかし，ご承知のように，国語にしても，英語にしても，文法を好きだなんていう生徒はそんなに多くない。理由はいろいろあるのですけれどもね。説明の仕方に工夫がないなどというようなこともあるでしょうけれど，それはどちらかというと本質的な問題ではなくて，本質的な問題というのは，なぜ文法を学ばなくてはならないかということが学習者に理解されていない。特に母語の場合には，先ほど言ったように，別に文法なんて知らなくたって，主語･述語なんて知らなくたって，品詞概念なんて知らなくたって，活用なんて知らなくたって使える。なのになぜ文法を学ばなくてはいけないか。これは，きちんと学習者に伝えなければいけないことですけれども，それが十分に伝わっていない。だから文法が嫌いになるのだと私は考えています。

国語の文法，小中高で現代文の文法の基礎を学びますけれども，以前は古文を読むときに必要な古典文法を学ぶための布石としての意義がありました。現代語は文法を学ばなくても一応使えるけれども，古文を支えている文法は学ばなくてはだめで，それを学ぶための布石としての現代語の文法を学ぶという意味があったわけです。しかし，今ではその意識も薄らいでしまったということがあります。しかし，そうであっても，現代語の文法を学ぶということは別の意味で重要な布石としての役割があって，それは外国語，現実的には英語の文法を学ぶための布石だということになります。ここの部分が子どもたちにきちんと理解されていない，伝わっていない。だから，子どもたちは現代語の文法を積極的に学ぼうとはしないということになってしまいます。

具体的な例を挙げましょう。品詞概念と，「～を修飾する」という概念について考えます。まず英語からいきますと，

(1) Whitney sings beautifully.

(2) Whitney sings with a beautiful voice.

両方とも意味は似たようなもので，ホイットニーが美しく歌を歌うということを述べたものです。ただ，(1) では beautifully という形が使われていて，(2) では beautiful という形が使われています。これ，入れ替えるともちろんだめで，「sings beautiful」も，「sings with a beautifully voice」もだめです。

なぜだめかといえば，それは簡単で，(1) の場合は，美しいさまをあらわす単語は動詞 sings を修飾するから beautifully という形になるし，(2) の場合には，その美しいさまをあらわす単語が voice という名詞を修飾するから，beautiful という形になるということです。この説明に，「動詞」「名詞」という品詞概念と「～を修飾する」という概念が必要になってきます。

これは英文法で習う基本的なことがらの１つですけれども，こんなことを言われても，子どもたちにとっては，英語は外国語ですから，直感がきかず，beautiful と beautifully を入れ替えるとどんな具合におかしくなるのかはわかりません。ただ，言われたとおりに覚えるだけです。しかし，同じことを母語である日本語で小学校段階からきちんと理解させておけば，事情はまったく変わります。

つぎの例文を見てください。

(3) 亜矢は美しく歌う

(4) 亜矢は美しい声で歌う

(3) では「美しく」が，(4) では「美しい」が使われています。(3) の「美しく」を「美しい」に代えて，「アヤは美しい歌う」とするとだめですし，(4) の「美しい」を「美しく」に代えて，「亜矢は美しく声で歌う」とすると，別の意味ではいいですけれども，(4) とは意味が違ってきます。どうしてそうなるかといえば，先ほどの英語の場合と同じで，(3) の場合は，「歌う」という動詞を修飾するから「美しく」という形になり，(4) の場合は，「声」という名詞を修飾するから「美しい」という形になる。今度は母語ですので，きちんと子どもが直感を使って理解することができます。

こう考えてくると，英語教育と国語教育がそもそも別になっていること自体がおかしくて，一体化すべきだ。すぐに一体化というのが無理なら，連携すべきだということがわかります。ところが，両者の壁はかなり厚く，先ほどの例でしたら，学

校英文法ではbeautifulは形容詞，beautifully副詞ですけれども，学校国文法でいくと，「美しい」というのは形容詞「美しい」の連体形，「美しく」は形容詞「美しい」の連用形ということで，形容詞対副詞というのとは別扱いになります。しかし，もちろん日本語でも副詞というものはあるわけで，「太郎は速く走る」の「走る」は，形容詞「速い」の連用形ですけれども，「太郎はゆっくり走る」の「ゆっくり」は副詞になるといったようなおかしさが生じてくることになります。

これは，もちろん，学校英文法と学校国文法の理論的な基盤が違うからですけれども，こういったあたりから連携を進めていくという着実な努力が必要になってくる。その文脈でいえば，日本語を母語としない子どもたちに対する日本語の教育である日本語教育が一枚かんでくれると，今いったような壁を乗り越えやすい，壊しやすくなるということがあるかと思います。

国語教育と英語教育，それに，日本語教育の間には有機的な関係があります。国語教育と英語教育は，学習者が主として日本語話者であるという点で共通しています。英語教育と日本語教育は，対象言語が学習者にとっての外国語であるという点で共通しています。そして，国語教育と日本語教育は，対象言語が日本語であるという点で共通しているというところがあります。

さらに，日本語教育に一枚かんでもらう別の必要性もあります。それは急速に多言語化，多文化化する日本社会の中で，日本語教育を学校教育の一環としてもきちんと位置づけておく必要があるということです。今日も小学校の先生方がたくさん来てくださっていますけれども，教室の中に日本語教育を必要としている子どもたちが増えていくという状態は今後一層加速していくだろうと思います。

これまでのところを簡単にまとめておきましょう。英語が使えるようにならない原因は，母語である日本語の文法が学習者に十分に意識化されていないので英語の文法を学ぶ枠組みが十分に形成されていないという点にある。私はこのあたりのところを「ことばの気づき」という用語を使ってずっと説明してきたのですけれども，名称はともかく，日本語の文法の意識化が不十分だということです。一方，英語教育のほうは「コミュニケーション英語」という名のもとに，文法学習というものが軽視されていく傾向にある。軽視などはしていないという立場の人もいるようですけれども，少なくとも10年，20年前の教科書と比べてくだされば，確実に文法に対する軽視というものが行われていることがおわかりいただけるかと思います。

この点，文法，さらに言えば，文法にもとづく分析的英文解釈を軽視したつけが結局，英語が使えるようにならないという形で回ってきているのだということをもっと多くの人たちに気づいて欲しい。私はコミュニケーションなどどうでもいいのだと言っているのではありません。この点，ぜひ冷静に考えていただきたいと思います。

ちなみに，先ほどグローバル志向の英語教育という話が出ましたけれども，グローバル精神をもった人に不可欠な要素の1つとして，個別言語と個別文化の相対性の理解ということがあります。言語でいえば，日本語，英語，スワヒリ語，日本手話といった個別言語は，個別性，つまり，それぞれの個性をもってはいますけれども，しかし優劣があるわけではない。文化についても同様です。この相対性の理解は，グローバル精神をもつ人に欠かすことができない要素だと思います。その点で，今のような英語だけを重視した外国語教育の政策というのはその逆の方向を向いているといわざるを得ません。

ここまでの話で，賛成であるか，反対であるかは別にして，国語教育と英語教育の連携，一体化というものが必要であるという私の考えは，それなりにご理解いただけたかと思います。さて，去年（2015年）の8月に出ました『初等教育資料』に，私と，小学校英語教育をずっと先導してきた直山木綿子さんという教科調査官の対談が載っています。『初等教育資料』は文科省初等中等教育局教育課程課・幼児教育課を主管として編さんされている月刊誌です。

その対談の中で国語教育と英語教育についていろいろと話をしているのですが，直山さんが，「そ

れぞれ個別言語にルールがあるということにまず気づかされます」と言います。だから，そういう観点からいくと，「普遍性に気づくということ，それが大切ですね」と言っています。「普遍性」というのは，日本語，英語，スワヒリ語，日本手話といった個別言語の基盤にある原理のようなものを指すとご理解ください。直山さんは，少なくとも教科調査官として，以前は，英語教育では，英語という個別言語の枠内で事を完結すべきだと基本的には考えていたように思います。その直山さんが，普遍性ということを言い出したところにとても大きな意味があるように思います。さらに，「小学校で外国語教育が導入されたことで，ことばへの気づきを起こすスイッチを押していると思っているが，国語教育と共同することも必要だと考えている」というようなことを発言しています。文科省が関与している月刊誌の中でこういう発言があったというのはとても大きな意味合いがあるし，直山さんもそれなりの覚悟でこの発言をしたのだと思っています。

以前，外国語活動，英語活動という文脈で，日本語のことを持ち出したりすると，「それは国語の領域だから，余り深入りしないほうがいい」というようなことを言われたりしたものです。しかし，子どもたちのあたまの中ではそんな境界はなくて，むしろ日本語とか英語とかといったような境界を取っ払ってしまう，つまり，ことばというくくりで理解したほうがずっと自然だということを私が言いました。直山さんはそれを受けて，「外国語教育単体で考えるというのではなくて，母語とあわせて言語教育としてとらえる必要があるように思います」と，そんなことまで発言したので，大分考え方というか，少なくとも表現の仕方が変わってきたなと思いました。

月刊誌に出ているのはそこまでなのですけれども，実際の対談はもうちょっと先まであるのです。「連携する，一体化するというのはとても大変なことではあるけれども，それは技術的な問題だから，この流れが続いている間はぜひ生きていたいなと思います」と私が言ったのを受けて，直山さんは「間に合えばいいのですが」と返してきました。実は，直山さんとは長い間の友人で，こんなことを言い合える仲なのです。この友情の証，これが今日の皆さんへのお土産です。

そろそろ終盤なのです。小学校での英語教育が今日のシンポジウム全体のテーマなのですけれども，私の演題は，「小学校での言語教育を考える」と，「言語教育」という言い方をしているところにご注意ください。

私が言いたいのは，英語教育を小学校に導入するというのがすでに既定路線であるならば，その機会を利用して，これまで実現できなかった言語教育を実現する，あるいは，言語教育という考えを学校教育の中に浸透させていく，そういう機会にしたいと思っています。小学校英語教育は害があるから反対だということばかり言っていても事は進みませんで，この機会を何とか生かしていく必要，その方法を考えていくほうが生産的だろうと思います。

もう一度繰り返しになりますけれども，言語教育という概念は，日本語，英語，スワヒリ語，日本手話といった個別言語を超えた「ことば」という概念に根ざしたもの。つまり，それぞれの個別言語というのは個性，個別性をもっているけれども，質は同じで，共通の基盤（原理）の上に築かれたシステムなのだということに根差したものです。そして，子どもたちに，そのことが，例えば日本語，英語を通じてでもいいですけれども，自然に理解されていく，そういう体制をつくっていけたらいいなと思います。

いまご覧になっているスライド（省略）の左に映っているのはヴイッキーという雌のチンパンジーで，右はヘイズ夫妻の奥さんのほうです。ヘイズ夫妻というのはアメリカの研究者で，チンパンジーがことばを身につけることができないのは，野生で育つからで，家庭の中でことばに触れて，しかも周りの人間が，赤ちゃんを育てるように愛情豊かに育てていけば必ずことばは身につくはずだという考えを持っていました。そこで，ヴイッキーをもらい受けてきて，数年間うちの中で，愛情豊かに育てたのですけれども，結果として，ヴイッキーは英語を使えるようにはなりませんでし

た。ヴイッキーの名誉のためにいっておくと，英語の単語を４つだけ，そういわれてみればそういうふうに聞こえないこともないなという程度に発音ができるようになった単語がありました。それは「パパ」と「ママ」と「カップ」と「アップ」という４つです。

ただ，これはチンパンジーにとって気の毒な話で，というのは，チンパンジーの口の中（「口腔」と呼びます）というのは人間の口の中と違って，スペースがとても狭いのです。皆さん，例えば「あいうえお」と発音してくだされればわかるように，口の中で舌がいろいろと形を変え（たとえば，ある部分を他の部分よりも高く上げ），それによって母音の区別をするのですけれども，チンパンジーにはこの区別するのに十分なスペースがありません。だから，ヴイッキーは，英語は身につけたのだけれども，残念なことに英語を話すことができなかったという可能性があります。

その問題に決着をつけるために，手話を使ってチンパンジーに教えようというプロジェクトが行われました。そうしたプロジェクトは複数あるのですが，いまご覧いただいているの（省略）はニームというチンパンジーです。このニームに，これはアメリカでのプロジェクトですのでアメリカ手話を訓練しました。結果どうなったかというと，100 以上の手話単語を覚えました。さらに，その手話単語を２つ３つ横に並べることもできたのですけれども，ニームには決して乗り越えることができなかった壁があります。それは何かといったら文法にしたがって文を作ることなのです。本当はきちんと説明するといいのですけれども，ごくごく簡単にいってしまえば，単語を幾つか集めてまとまりを作る。そして，そのまとまりに新しい語を加えて，より大きなまとまりをつくる。そして，文というまとまりを作り上げる。

ごく簡単な例を挙げておきましょう。「きれいな」と「絵本」をその順で組み合わせて，「きれいな絵本」というまとまりを作る。それに，「買った」という語を重ねて，「きれいな絵本を買った」というより大きなまとまりを作る。さらに，「太郎」という語を重ねて，「太郎がきれいな絵本を買った」という文を完成させる。ちなみに，「が」や「を」については，いまの簡略な説明では端折ってしまいましたが，きちんとした説明が用意されています。

さらに言えば，いま作り上げた文をさらに大きな文の一部にすることもできます。たとえば，「花子は太郎がきれいな絵本を買ったと思っている」という具合です。せっかくですから付け加えておくと，この新たな文をさらに大きな文の一部にすることもできますね。そして，同じことを原理的には（現実には，あまり複雑にすると発話できないし，理解もできませんから，ある程度のところでおしまいにしますが）いくらでも繰り返すことができる。「無限」ということですね。

いまお話したようなやり方で文をつくるという作業は人間にしかできないのです。そこのところを捉えて，私は，「ことばは人間だけに与えられた宝物だ」と言っています。せっかく与えられた宝物ですから，大事にしなくてはいけないし，その力を十分に発揮させる必要があります。そのためには，小学校，中学校，高等学校，大学の先生方の役割はとても重要で，子どもたちが与えられたことばという宝物の力の価値をきちんと理解し，その力を十分に発揮させることができるように支援をすることが大切です。特に小学校にあっては，グローバルな有用性を持つという理由で英語を教えるというような，狭い枠の中で物を考えるのではなくて，あくまでことばという宝物の価値を理解し，その力を十分に発揮できるようにする，その一環として英語を利用するのだという考え方に立っていただくと，とてもいい展望がこれから開けてくるのではないかと思っています。

ご清聴，ありがとうございました。（拍手）

★司会者

大津先生，どうもありがとうございました。

それでは，今の問題提起を受けつつ，それぞれのシンポジストの方が自分の考えをお話ししていただくことになるかなと思います。まず，柳瀬先生お願いします。

★柳瀬

よろしくお願いいたします。まず資料の説明ですけれども，お手元にあるスライドの印刷資料は，

私のブログから原本をダウンロードできますので，ご興味がある方はダウンロードしてください。

（http://yanaseyosuke.blogspot.jp/2016/01/19.html）

本日はたくさん論点があります。本当は一つ一つの論点を詳しく丁寧に論証しなくてはいけないのですけれども，時間がないので，結論だけしかいわないところもあります。どうぞお許しください。

語り方について申し上げます。教育学部にいますと，楽な２つな方法があるんですね。１つの楽な方法は，文科（もんか）が言っている―文科というのは文部科学省です。文科が言っていることを否定しても無駄だから，皆さん，これ覚えてね，と解説するやり方です。このやり方は非常に楽です。固定客も多くつきます（笑声）。もう１つの楽な道は，「文科が言っていることはとにかくけしからん。あいつらはとんでもない」と，反文科の態勢を貫いてしまうやり方です。これはこれで，少数派の固定ファンがつきます（笑声）。

でも，教育の現場というのはいろんな矛盾があるわけですよね。いろんな矛盾にみちた現実を引き受けなくちゃいけない。だから，その現実を切り開けるような語り方をしなくてはいけないなと，先ほどの２つの楽な方法をとってはいけないなと自戒しているつもりです。今からはそういった形でお話ししていきたいと思います。

お話の流れとしましては，まず事実を確認します。２番目に，その事実からこういうふうな前提で考えるべきじゃないのかという提案をします。３番目に，現在の政策の危険な点を指摘します。４番目に，さっきの大津先生の提言をどのように受け入れるか考えます。最後に，語り合う力，つまり，授業において子どもと教師が，あるいは授業研究で教師同士が語り合う力，を基盤にして考えていかなければ，先ほどいいました矛盾だらけの現実を引き受け切り開くことはできないのではと論じます。

では，その忘れてはならない事実って何でしょう。単純な事実として，全国に公立小学校は約２万校あります。児童数と教員数は，英語教育に関わる学年を１年生から６年生までのうち４学年としまして仮に全数の６割としても，約400万人の児童と約25万人の教師がいます。約25万人の教師に対して，４年後の2020年から約400万人の児童に対する英語教育を本格化するようにと文科は伝達しているわけです。これは大変なことですよ。

と言いますのも，平成15年から19年の間，中高の英語教師６万人を対象とした５年間の全員研修がありました。文部科学省はこの成果をいまだきちんと総括していないように私は思いますけれども，英語を専門で今までやってきた中高の先生へのこの研修だって，そんなに効果があったとは思えません。もちろん，効果があった点もありますよ。でも，そんなにがらっと変わったわけじゃありません。しかし，今回はそれよりも規模が大きくて，時間が短くて，しかも，今まで余り英語教育をやってなかった人が小学校の先生には多くいらっしゃるわけでしょう。となれば，この大規模の試みはかなりしんどいものだということは，否定したってしようがないですから，まずこれを認めましょう。

その次に，我々が教育をやっているということは，教育基本法の，人格の完成とか平和で民主的な国家および社会とか，あるいは心身ともに健康とかいった抽象的な理念がありますよね。これ当たり前で，何で法律の条文とかを出すのだとお思いかもしれませんけれども，ここに表現されているような理念で我々は教育をしていこうというのがこの国の合意なわけですから，ここは忘れてはいけないと思います。

では，今の２つ，大規模な試みということと，教育基本法という理念があってのことだということを踏まえると，これから，私が今からいう５つの考え方を前提とすべきじゃないかなと思っています。大規模な企てということから２つ，教育基本法から１つ。それから，さっきは言いませんでしたが，英語を教えることから２つの前提を導き出します。

最初の，「人間の複数性」とは，ここ数年日本でもブームになっていますけれどもハンナ・アーレントが言っていることです。彼女は，「一人だけでは存在できず，いろんな人と共存せざるを得ない

のが人間であり，これは人間が人間である条件としてはとても大切なのだ」と言っています。

そしてこのスライドにある２つの人間観のどちらをとるか。どちらも正しいでしょうけれども，どちらをとったほうがいいか。あるいは，どちらをとったら危ない面があるかを考えてください。1つは，人間は「同質だが偏差がある」英語でいうと“same but deviant”です。つまり，人間はみんな同じなのだけど程度の差がある，例えば学力の差があるというような考え方です。もう１つは，「異質だが対等である」（“different but equal”），つまり「人間は一人一人違う。個性も違う。量において違うだけじゃなくて，人間は一人一人，質において違う。しかし，政治的には対等なのだ」という考え方です。

ハンナ・アーレントは後者の考え方をとっています。彼女は，異なる人間の共存を複数性と呼び，それを人間の条件の一つとしました。その複数性，「人間は異なるが対等だということ」を否定するということは全体主義につながります。全体主義といわれたらピンとこないかもしれませんが，アーレントの経験を考えてみましょう。アウシュビッツで殺されたユダヤ人は600万人です。その当時のヨーロッパのユダヤ人は1,000万人だったそうですから，わずか数年間で10人に6人が殺されたのです。これはすごいことですよ。アーレントは生き残ったユダヤ人の一人として，全体主義について深く考えざるを得なかったわけです。

全体主義から英語教育に話がちょっと飛び過ぎじゃないかと思われるかもしれませんけれども，現在の日本の英語教育は，子どもや教師の多様性というのを無視あるいは軽視しているのではないかというのが僕の懸念です。「みんな同じだよね，みんな英語必要だよね，英語が上手な先生も余り上手じゃない先生も，英語が得意な児童・生徒もそうでない児童・生徒もいろいろいるかもしれないけれども，それは程度差に過ぎず，みんな同じだから頑張ろう」というふうになっていないかなと思います。

次の前提は，複合性です。複数性と複合性で似た用語で面倒くさくてごめんなさい。複合性の英語表現は有名ですよね。Complexityです。普通，日本語では複雑性などと訳されています。そんな複雑性，あるいは複合性って何と尋ねられたら，一つの答え方はこうです。「あるシステムがあって，そのシステムの構成要素の数が余りに多過ぎる。さらに，それを複数組み合わせた数というのは，当然のことながらそれよりもさらに大きくなる。それが余りに莫大な数だったら，だれもそのシステムの全ての可能性を把握してしまうことができない。そういった場合にシステムはcomplex，複合的だ」ということです。

この定義に従うならば，教育界全体はおろか，1つの学校，あるいは1つの学級，というよりも，例えば1つの50分間の授業，それも複合的だと考えたほうが僕は物事がみえやすいんじゃないかなと思います。これは認識ですから，そんなことはない，1つの授業はマニュアル1つでやればいい，そういう授業観も成り立ちますよ。でも，よほど理想的な状況じゃない限り，そういう授業観ではまともに授業はできません。

我々は近代科学というのに余りにもなれてしまったから，因果法則とか，唯一の正解があるのだという発想になれてしまっていますけれども，それは単純なシステムにおいていえるだけで，複合的なシステムで，単純な因果性とか唯一の最適解ということはあり得ません。しかし，我々はあたかも教育のやり方に，英語教育のやり方に，小学校英語教育のやり方に，唯一の正解のやり方があるんじゃないか，それをやっていけばいいんじゃないかという発想にとらわれているんじゃないかなとも思えます。そういう考え方を工学的なアプローチと私は呼んでいます。いってみるなら，工場の大量生産を考えるように教師を大量生産する。4年間で25万人を育成するなんていうのは，僕は大量生産だと思っています。そういう発想じゃなくて，生態学的アプローチ，非常に複雑な環境の中で生きている生物について考えるように教育を考えた方がいいのではないかと思って短い文章も書いたことがありますが，その詳細は今日は省略します。

次，教育基本法。忘れてはならない事実でした

ね。そこからは，統整的原理としての目的という前提を導きたいと思います。またやたらと難しそうな言葉ですが，まず目的と目標の違いを簡単に述べます。僕ら，数値目標というでしょう。でも，数値目的といわないじゃないですか。数値目的ってあまり聞いたことないでしょ。だから，目的のほうは抽象的で，目標というのは具体的です。その２つの違いはちゃんとしておいた方がいいと考えます。抽象的な目的と具体的な目標の違いです。目的というものは，抽象的，長期的な方向づけで，いろんな人による複数の異なる視点から，目的が示す理念に沿って考えるということです。目標のほうは，具体的，短期的な到達点で，１本の物差しではかることができます。

では，何でそんな抽象的な目的が必要なのか，具体的な目標だけでいいじゃないかと思う方もいらっしゃるかもしれませんが，抽象的な目的の理念に即して複数の人が考えることによって，具体的であるだけに単一的な目標が暴走してしまうことを防ぐことができるのが，抽象的で長期的な目的の重要な役割なのだということをアーレントは指摘しました。アーレントはしばしばカントを引用するのですけれども，カントが言っていることは，基本，人間には感性のレベルと知性のレベルと理性のレベルがあるということです。感性というのは直接に体験できるもの，彼の言い方なら直感のレベルです。知性というのは，直感を知的にまとめたもので，彼はそれを概念と呼びます。その概念をさらに抽象化したものが理念です。

例えば，僕は写真が好きですから，ある風景をぱっと見て，あっ，いいなと思います。これは，直感です。で，写真を撮りますが，撮ったら，やはり逆光は，きれいだななどと考えます。ここで，逆光という形に概念化しました。感性の直感を知性の概念にしたわけです。でも，その概念をさらに抽象化して，そもそも美とは何か，美しさとは何かと考え始めたら，非常に抽象的な理念になります。

目的というのは理性的な理念なのですけれども，その目的を知性的な概念として考えることは危険だとカントも言っています。抽象的な目的，例えば，平和で民主的な国家及び社会の形成とか，心身ともに健康であることとかいった理念を１本の物差し，つまり何かのテストとか指標で測れると思うのは錯誤だということが，カントが200年以上前に言ったことから導けます。

理念というものは我々を方向づけるものです。我々に，こうしなさい，ああしなさいと，箸の上げおろしまで指示するようなものを，目的とは呼びません。目的と目標の違いをわきまえて，目標が目的に取ってかわるようなことがあってはなりません。

次に，英語に関してです。現代のグローバリゼーションの特徴とは何かといったら，まず加速化です。万事が高速化し，しかもその高速化自体の進行が加速化している。次の特徴は，先ほども少し述べた複合化です。思わぬものが結びついて，みんなびっくりするようなものができてきている。例えば，宗教原理主義に基づくISが電子的な手段で，巧みなプロパガンダをやったりするとか，思わぬ組み合わせができてくる。これがグローバリゼーションの１つの側面だと思います。その結果，世界というものが非常に多様になっています。この多様化が３つ目の特徴です。しかし，文科や政府が考えているグローバリズムというのは複合化や多様化を十分にとらえているだろうか。資本主義の競争に勝つためにはどうしたらいいか，そのためには英語は必要だよね，頑張ろう，頑張りなさいと，それだけしかいってないような気もするのですよ。もちろん，役所の文章というのはうまくつくっていますから，どこかにいい言葉を配置したりするのですけど，僕は非常に単純なグローバリゼーション観が根底にあるんじゃないかと思っています。

次の前提は複合的言語観です。今日は「複」という字がいっぱい出てきますね。複合的言語観こと plurilingualism は，もともと欧州評議会が考案した理念です。私なりの解説を加えて説明しますと，純粋な○○語だけを使用するという状況はなくて，どんな言語も他言語からの影響を受け，どんな人も多くの言語の影響を受けた言語使用をしていますということです。例えば文科も，英語教

育はしっかりやらなくちゃいけないが日本人としてのアイデンティティーも大切にしろと言っています。その通りだと思うのですけど，じゃあ何で日本人のアイデンティティーという片仮名を使うのかなと思います（笑声）。このように1つの言語の中にもさまざまな変種が入っています。僕も今日，標準的な日本語で話したり，口語，俗語，方言を使ったり，外国語の単語も使ったりしているかと思います［補注：このテクストは，書き起こしの際にかなりの表現を標準語化したものです］。人のことばには，いろんなことばが入っているわけです。

さらに新たな外国語を学ぶということも単純なことばではありません。それは，日本語という積み木がありました，その上に英語という積み木を乗せます，次は日本語という積み木を除いてみましょうとかいったように，積み木を重ねるような単純なものじゃない。喩えてみますなら，分子です。原子は化学結合して分子になりますが，その分子は，もともとの原子がもっていなかった機能や働きをするようになります。新たな外国語の学びは，積み木を重ねることというより，異なる原子が結合して分子ができるようなものだと考えたほうがいいんじゃないかと思います。

第二言語使用から第一言語の影響がなくなることなんかありません。後でもちょっと言いますけど，文科は英語の授業は英語でやりなさい，日本語を使ってはいけませんと基本的に言っています。でも授業中に日本語を使わなかったら，日本語の影響がなくなるといった単純なものではありません。これについては，たくさんの研究があります。

さあ，これらの前提を踏まえた上で，現在の政策の危険な傾向について考えてゆきましょう。

第一に，等質化としてのグローバリゼーション観です。現在の政策は，非常に等質的なグローバリゼーション観をもっているような気がします。2000年代の最初の頃，『ニューヨークタイムズ』のトーマス・フリードマンが言っていたのは，「世界は今フラットになった，みんな資本主義で頑張ろう」といったことです。彼には『レクサスとオリーブの木』という本もありましたが，そこでのレクサスというのは高価な商品，グローバルの光の部分であり，みんな欲しがるものの象徴です。でも，地元の愛着の象徴であるオリーブの木も大切だと多くの人が考えていると彼は書きましたが，これは，さっきいった，英語力をつけろ，しかし日本人としてのアイデンティティーも強めろという構図ですね。

次に外国語における単一言語主義です。先ほども言いましたように，英語の時間は日本語を基本的に使ってはいけません，英語だけでやりなさいと文科はいっています。中学校でもそうしなさいと言っています。その半面，英語以外の外国語をもっともっとやりましょうという声がちょっと少なくなってきた，だんだん弱くなってきたような気がします。

広島大学もそうなのですが，英語で授業をしなさい，英語でシラバスを書きなさいなどと，大学全体で数値目標を掲げていますから，そうしないと怒られます。スーパーグローバル大学として，ある程度以上英語を使わなくてはならないように強く誘導されています。

でも，ちょっと考えてみましょう。教育の目的の理念を定めた，教育基本法がありましたよね。その教育基本法の抽象的な理念から，別に法律だけからじゃなくてもいいのですけれども，理念からいろいろ考えるべきところを，数字でコントロールしようという発想は，ちょっと危ないと思います。そういうわけで，第三の危険な傾向が，エビデンス至上主義です。次々に数値目標が掲げられ，それを達成できないと予算や人員を減らされますから，とにかく皆さん数値目標達成に戦々恐々とします。

英語教育の業界では，今，4技能テストブームです。4技能を測るテストがいいテストとほぼ無条件に考えられています。英検もあと二，三年で4技能を測定できるようにしようというような形で急速にブームになっています。これも語り始めたら切りがないのでちょっとだけしか言えませんが，“privatization”というのは，普通，日本語では「民営化」と訳されますけれども，「私事化」とも訳せます。この訳語ですと，本来は公的なことを私事化，

個々人の問題にしてしまうという側面をよく表現できます。様々な外部試験は有料ですが，その有料の試験を公教育にほぼ必須の要素として組み込むことにより公教育の私事化が進行しているように私には思えます。

ご承知のように1980年代以降，新自由主義的な発想がすごく強い状況です。僕は強過ぎると思っております。毎日新聞の記者が1月8日の記事で全国学力テストが教育を歪めかねないことを指摘していました。ある自治体の教育長は，「うちの子どもたちは，地域や仲間を大切にして，将来は地元に残る。これは試験では測れない成果だ」と言いましたが，記者が「議会で同じ答弁ができますか」と尋ねると教育長は首を横に振ったそうです。「議会だったら，学力テストの成績を上げますといわないと議員さんに怒られる」そうです。テストで測れるのは教育の成果の一部なのに，テストの点数だけが権力につながっているのです。

テストの点数というわかりやすい数値が示されれば，社会はそれに引っ張られます。このままでは学力テストという国が定めた物差しに従って子どもたちを競わせる風潮が強まるだけです。これで多様性を大切にしていると言えるのでしょうか。英語教育も今や中高の成果が英検などの合格率で測定されることが当たり前になってきています。この場には，学校以外の民間で英語を教えている方もいらっしゃると思います。民間ですばらしい実践をなさっているところは多いです。でも，民間で怖いのは，保護者から，「英検は受かりますか？」といわれたら，ものすごいプレッシャーになってしまうことです。そうしたら数値を上げることを最優先事項にしてしまいます。さらに，文科も，テスト業者も，欧州評議会の基本理念である複合的言語観についてはほとんどふれないまま，CEFR（セフアール）という基準だけを取り上げて，その数値をどんどん一元化しようとしています。これは怖いことだと私は思っていますが，たいていの英語教育関係者はこの一元化を進歩だと信じて疑っていません。

では，さきほどの大津先生の提言をどう考えるかという話題に移りましょう。国語教育と英語教育の一体化というのはむしろ当然の流れだと思います。しかし，複合的言語観からすれば，日本語が第一言語でない子どもが一定のパーセントでいるということは絶対に忘れてはいけません。多様化という観点から考えますと，もし小学校英語教育が教科化されて，なおかつ現在，文科が推進している，外部試験をできるだけ使いましょういう傾向，例えば英検2級の合格率を高卒時に何％以上にするといった数値目標を設定してそれで教育の成果を測る傾向が小学校に下におりてきたら，―実際，小学生用の英検，あるいは英検以外のテストも出てきました―その物差しが強大になり過ぎて，本来は多角的に考えるべき教育の営みが，1つの見方だけに支配されかねないことは非常に怖いと思います。

目的という観点からすれば，成果がテストで測定できない教育は認めがたいといわんばかりの認識に対しては，僕らは反論しなくてはなりません。また複合性の観点からすると，大津先生の案はすばらしいと思うのですけれども，でも，それを今から4年間で25万人の教員にとことん理解してもらおうと思ったら，それは大変です。

ここで考え方の大胆な転換が必要です。ある一つの教育のあり方を25万人に伝えるのではなく，25万人がそれぞれに考え実践した教育のあり方について話し合い多様な実践を育てると考えるのです。小学校教員が25万人もいるから大変だと考えるのではなくて，25万人の異なる人間が真剣に考えて，お互いに語り合ったならば，これはすごいものが出ると考えるべきです。「いや，25万人がばらばらなことをしてしまったらどうするんだ」という反論に対しては，「そんなことはないです。我々には理念がありますから」と答えます。我々は理念という方向で，漠然とかもしれないけれども，ある程度の方向性を理解した上で，衆知を合わせることができます。僕はこれが現実的な道だと考えています。

というわけで，「語り合う力」を訴えたいというのが今日の僕のもっとも言いたいことです。

小学校教育は日本が世界に誇れるものだと思っています。日本の小学校教員の力量は高いです。

その上で述べたいのですが，小学校の教員免許状をとろうとする大学４年生の少なからずが水泳やピアノの特別訓練をします。それと同じように英語の発音の特別訓練なども必要かと思います。その上で，小学校の教員が自由に語り合い，自ら英語教育実践を創造し，その結果をさらにお互いで語り合う文化を普及させるべきです。

民間の実践でも，これまでの小学校外国語活動でも，本当にすばらしい活動というのは出ています。英語教育の専門家と自称している人間がびっくりするような新しい発想のものはたくさん出ています。また，すぐれた教師は子どもと語り合っています。もちろん子どもは，無言の語りとか表情で語ってくる場合もありますけれども，そういったものも含めた子どもとの語り合いからよい授業は生まれてくるものです。これは私がこれまで多くの教師に出会ってきて得た信念です。よい授業研究も，一方通行じゃなくて，教師の間での語り合いの力を通じて行われます。

僕も教師の語り合いということを大切に考えてきました。ハンナ・アーレントの“Macht”あるいは“power”を僕は「語り合う力」と意訳していますけれども，その語り合う力というのは複数性に基づいています。一人ひとりは異なるが，誰一人としてないがしろにしてよい人間はいないということを大前提として，その共同体で共に生きるという責任を引き受ける人々が語り合うわけです。２チャンネルやツイッターで無責任な批判や放言をするようなやり方ではなく，共同体での責任を担う覚悟を定めた人々が，自分の行為に忠実に，新たな関係をつくり出すために，一人でなくて，互いに創り出す力が語り合う力です。これは一人ではつくり出すことはできません。しかし，共同体で生きることを引き受けた人間が，集って語り合うときに出てくる力が“Macht”あるいは“power”です。

また，オープンダイアローグというのは，今非常に注目されているものです。最初のキーワードは不確定性の容認です。簡単に言いますと，そこでは話し合いをするときに唯一の正解がないことをまず積極的に認める。次のキーワードは対話主義です。これは，モノローグつまり，ひとり語りをしないということです。このシンポジウムでも，もし，大津先生はああ言ったが，柳瀬はまったく別のことをこう言った，朝倉先生も独演状態だったというモノローグの連続だったら，おもしろくないでしょう。モノローグの連続の会話ってたまにありますよね。それではいけない。やっぱり対話になってないといけない。

もう一つのキーワードは多声性です。対話主義とちょっと似ていますけど，これは，異なる声，異なる質の声，違う意見が共存していることを積極的に価値として認めるべきだということです。そして，相互扶助的理解，つまりお互いに補い合って何とか理解していくことが大切です。一人の人が全部わかるなんていうことはない。しかし，５人いたならば，10人いたならば，それぞれが助け合って理解を補って，集団全体として何とかやっていく。そして，実はこれはものすごく大切なのだけれども，情動的共鳴，つまり，お互いに気持ちを寄り添わせることが重要です。「何だよ，青いこと言いやがって」と言われるかもしれないけど，でも，話し合いのときにはお互いの気持ちを寄り添わせる，つまりは情動が共鳴することがとても大切なのだということが，オープンダイアローグの実践が強調していることです。

まとめます。大規模な試みというのは，トップダウンの計画で，一方的に断行して，数値目標でガチガチに管理したら危ないと思います。教育基本法といった目的の理念のもとに，だれも正解をもたないけれども，語り合うということ，語り続けるということ，これが大切です。数値目標を使ってもいいのですけど，でも，それはたかだか１つの側面にすぎないということを忘れてはいけない。

小学校教員は今まで授業を創造してきました。小学校教員には，僕は語り合う力があると思います。子どもと語り合う力，教師の間で語り合う力，これを活用するのが一番大切です。異質だけれども対等な人間というものが気持ちをお互いに寄り添わせながら，そして，相互扶助的に問題を理解していこうとする力を大切にすべきです。

僕も研究者や指導者と呼ばれるのですけれども，

研究者や指導者は，先ほど５つの前提などに余り慣れていない人が多いです。「唯一の正解がある。因果モデルがある。実験計画でやる。メソッドＡをやったならばこんな効果が上がりました」というふうな単純な考え方が多過ぎるように思います。もちろん全く間違いではないのですけど，研究者や指導者自身こそが変わらなくてはならないと私は思っています。

というわけで，済みません，５分ぐらい長くなりましたけれども，終わります。ありがとうございました（拍手）。

★司会者

柳瀬先生，ありがとうございました。

それでは，次は朝倉先生にお願いしたいと思います。英語教育ではなく，まさしく今の学校教育の現場の中に現実におられ，また，子どもの生活経験をずっと大事にしてこられた朝倉先生からのお話をいただきたいと思います。

★朝倉

改めまして，こんにちは。楽しいですね。大津先生のお話がございましたし，柳瀬先生のお話も，ああ，なるほどと思いながら聞かせていただきました。楽しいときはあっという間に過ぎるのですけれども，時計をみるともう１時間半たっていて，大学の授業でいうと休憩が入る時間帯ではあります。いろんな都合上，そのまま展開していきますが。

ちょっと体をほぐしましょう。肩を上げます。はい，下げます。もう一回上げます。ゆっくりおろします。首を回したりしてください。反対も。ありがとうございます。長く座るには適していないいすだと思いますので，どうぞ体を適宜動かしながら一緒に考えていただければと思います。

さて，「小学校英語の教科化に向けての懸念と展望」という形でお話をさせていただきたいと思います。その前に，私は，最初にご紹介がありましたように広島大学の教員ですが，同時に，現在広島大学附属東雲小学校の校長も務めております。ただ，今日は東雲小学校の考え方とか実践を報告する，ご紹介するということではなくて，個人の考えをお話ししますので，そういうふうにご理解いただければと思います。

お手元に資料としてスライドが６枚印刷されているかと思います。大きな流れはこのとおりです。ただ，実際に出てくるスライドはこれより数が多いです。いろんな都合で印刷してないものがありますので，それはスクリーンのほうをごらんいただきながら考えていただければと思います。

柱は４つです。１つ目，改めてですけれども，発表者の立場についてお話しします。それから，問い，考察です。それから，結論としての懸念を申し上げます。そして，教科化という流れがございますので，それに向けての展望をお話ししたいと思います。

字が青くなりました。私は柳瀬先生と違って，別にネガティブ，ポジティブ……（笑声），ということではなくて，見出しに関係することとかは青く。時々関係ないところで青くなったりしますが。強調したいところは赤くなったり線が引かれたりしますので，いろんな使い方があるのだなと思いました。

私は，生活科，総合的学習の教育法を専門にしております。ふだん，大学ではこれに関係のある授業科目を担当しております。生活科の担当は広島大学において１人なので非常に充実して，たくさんの授業をもたせていただいております。それから，小学校教育は全体をみていきたいなと常に思っていて，今日はそこのところで登壇しているのだろうと思いますが，あわせて，接続期の教育，幼小の接続，小中の接続，中高や高大もありますけれども，そういう接続期の教育についてもかかわらせていただいております。それから，教員養成，現職教員としてのグローバル教育ということについてもいろんな形でかかわっております。

グローバル教育にかかわっているのですけれども，余り大きい声ではいいませんが，マイクを通しているので大きくなりますけど（笑声），英語は上手ではないです。それは今から出てきますので。生活科だとか総合でお話しする機会はよくありますけれども，こういう内容でお話しすることは初めてですので，今日初めての内容―初めての内容って，初めての人にとっては全部初めてですけど（笑声），めったに聞けない話も出てまいります。

これ，表側の話です。表があるかということは裏もある。裏側，ちょっと恥ずかしいのですけれども，個人的なことで少し。私自身が小学校５年生のときです。このころから私の小学校英語に対する問題意識は始まっています。小学校５年生のときに，これからは国際化だと思いました。余り反応がないですね（笑声）。すごくないですか。小学校５年生で，もう50年ぐらい前の話ですけれども，これからは国際化だと当時思っていたのですね。いろんな環境があって，そういうふうに思ったのです。本当です。全部本当ですけど。国際化だと思ったので，５年生の私は何を考えたかというと，英語ができるようになりたいと考えたのです。まじめなので，ストレートに。

こういう私がどうなったかということが裏側の話ですけれども，英語ができるようになりたいと思いました。何をしたか。本屋に行きました。本屋に行くと，きっといいものがある。英語に関する本を探したのです。ほとんどないです。小学生が学習するような英語の本，ないです。今でも覚えています。何とか，小学生向けじゃなかったのですけれども，中学生の最初の初歩のものかなと思われるものが３冊ぐらいみつかったのです。探し方が悪かったのかもしれませんけれども，３冊みつけて持って帰ったのですね。持って帰った……間違えました（笑声）。１冊，買って帰ったのです。買って帰って家で読んで，気がついたことがたくさんありました。

その中の１つは，私のそのときの英語観は，日本語と英語の違いは単語が違うのだと思っていました。どう聞いても単語が違う。だから，一つ一つ日本語の単語に相当する英語の単語を覚えれば，それを順番に言っていけば英語になるのかなと思っておりました。これは当時の私の英語観です。もうびっくりですね。どうやらそうじゃない。単語が違うだけじゃないんだ。語順が違うし，先ほどの大津先生のお話のように品詞のこともいろいろあって，何だ，これは。もう，びっくり。というところから始まりました。

さらに驚いたことがあります。口の中がどうなっているか（笑声）。本をめくっていくと，最後に発音の仕方，こんな発音記号はこんなふうにしていうんですよという図が，今でも鮮明に覚えているのですけど，口の中の形の図がかいてあるのですよ。大津先生のお話で，今日，チンパンジーの口の中の話が出てきてびっくりしましたけれども，チンパンジーの口の中，狭いんだと思いました。人間の口の中は結構広くて，口の中の絵があって，舌の形がこうなって，このときにこういう音になるんですと。やってみようと思ったのですけれども。鏡もみました。気持ちが悪くなりましたけど（笑声）。できない，わからないんです。口の中がどうなっているか。えらいショックを受けて，とても自分は英語ができないんだと思った次第です。

中学生になってですね。英語を勉強するぞと。「This is a pen.」。みたらわかります。びっくり。英語を使う人って，こんな話ばっかりしているのかと思って，驚いた記憶があるのですね。どうしてそんな話をするのだろうと。「How are you?」「Fine thank you.」,「ちょっと調子は悪いんだけど」というときにどういうか教えてくれないのですよ（笑声）。（学校の）朝の健康観察でさえ，時々，頭が痛いですとかあるのに，調子が悪いときにどうすればいいのか。もう，私の頭の中は大混乱です。英語って一体何なのと，問題意識がますます高くなっていったわけです。

そうこうしているうちに中学生活も慣れていって，英語はよくわからないけど，英語ともつき合いながら。英語の歌が当時いろいろはやっていたので，ラジオの深夜放送を聞きながら，格好いい歌があって，ああいう歌をうたいたいと，レコードを買って聞きました。これを覚えた。英語はよくわかないけど，こんな歌がうたえれば楽しく覚えられるし，いいだろうと考えました。同じ考えをもった人もいるかもしれません。同じ考えをもった人。―ありがとうございます。思った以上にいました。

ところが，日本語としての意味も知りたいので，一応確認しようと，この単語の意味はどういう意味なのか確認しようとしたのですね。中学生用の辞書で引いても出てこない。何が出てこなかったかというと，「wanna」とか「gonna」とか，出て

こないのですよ。辞書に載ってないような言葉が出て，もうこれはだめだと思ってがっかりしました。

そんな私ですけど，どうしてかわからないですけど，アメリカの同級生と文通をしていたのです。意味がわからないですけど，英語があれなのに文通していたのです。でも，こんな英語力ですから，まともな文通ができないので，辞書の例文を探して，例文で，名前を，ジョンをアサクラにして，サイエンスをソーシャルスタディーズにして手紙を書きました。かなりやりとり，四，五年はしました。写真も送ったり，受け取ったりしておもしろかったです。私に英語の話をさせると大変なことになります。3時間ぐらい延々としゃべる。この続きがあります。

今考えれば，こういうことは結局私自身の役には立ったと思います。いろんな意味でですね。学習者の気持ちとか，何が問題なのかということを考える上で，自分自身の経験というのはすごく役に立ったと思います。表側の立場もあるのですが，こういう裏側の立場も踏まえながら続きを考えていきたいと思います。

さて，どういうふうに考察したかということですけれども，なぜ教科化なのかということと，教科化によって何が起きそうかということについて，この流れの中で考えてみたいと思いました。

なぜ教科化なのかというのは，いろんな説明がされていますけど，自分なりに幾つか取り出してみました。グローバル時代への対応ということなのかなとか，コミュニケーション能力の育成かなということですね。そういうことなのかなと思いながら聞いたり読んだりしています。格上げということも時々出てきます。この格上げというのは……。後でちょっと申し上げます。

グローバル時代への対応ということで，グローバルとは何ぞや。グローバル時代への対応というのは，それはそうだと思います。ただ，グローバルとは何なのかということはもう少し考えてみる必要があるのではないかなと私なりに考察をしています。私なりに考えているグローバルというのは，幾つかの段階があるのかなと思っています。

キーワードは多様性です。グローバルというのは多様性だと思いますが，もともと多様性だと思います。100年，1000年前は今よりももっと多様であったかもしれません。多様だと思います。そういう多様な時代があります。その多様な時代から，今はそうかもしれませんけど，多様性顕在化の時代になってきたのかなと思います。多様性があるということが前面に出てきていますね。そこで顕在化してきたのであつれきも出てくる。いろんな難しさも出てくるということですけれども，そこから先どこへ，どう向かうのか。私はこういうふうに向かいたいなと思っているのは，多様性，学び合いの時代，そして，多様性，共生の時代。共存といってもいいかもしれませんけれども，そういう方向に向かっていきたいなと思います。こういうグローバルであってほしいと思うわけです。

しかし，そういうところに向けての教科化なのか。そうだとすると，どういうふうであればいいのだろうかということを考えたところです。コミュニケーション能力の育成という，コミュニケーションというのもいろいろいわれていて，一言でいえないのですけれども，コミュニケーション能力は大切ですし，小学生が将来，英語や外国語を使っていろんな人と自由にコミュニケーションをとれれば本当にいいなと思います。自分自身が上手にできないことから考えても，そういうふうにできたらいいなと思いますが，大事なのは，コミュニケーションの中身であったり，コミュニケーションをしてその先に何があるのか，何のためにコミュニケーションをしようとするのか，何に向けてコミュニケーションをしようとしているのか，だったりですよね。そこは大事だろうと思います。そのこととコミュニケーションの育成が結びつかないといけないのではないかとも考えました。

それから，格上げについては，教科でない時間が教科になることをもって格上げと時々報道されるのですけれども，私は大体穏やかな人間で，大体にこにこしていますが，この格上げという言葉を聞くと，カチンときます（笑声）。どういう意味かというと，子どもたちが学校で過ごしている時間，いろんな時間がありますよね。教科の時間も

もちろん，授業の時間もあれば，給食の時間もあります。休憩時間もあります。掃除している時間もあります。どこに格があるのかと思います。子どもの生活の中に格なんていう発想はないです。上げるとか下げるとかの問題じゃなくて，格という発想が，どうしてそういうことが，いわれるのかなと思います。格上げといわれますが，これ，私，慎重でありたいと思うのですね。影響力は大きいです。格上げという言葉を使うと，みている人，聞いている人は，あっ，格が上がるんだと，言葉どおり受けとめるじゃないですか。それは残念だなと思うのです。

さて，教科化によって何が起きそうか。これもいろいろ考えましたけど，少しだけ紹介します。学習指導は厳密化するかもしれません。教科だからということで。格上げというようなことと関係するかもしれません。一生懸命するという意味で。いずれにしても大事なことでありますけれども，箸の上げおろしと柳瀬先生がいわれましたけど，いろんな意味で形が変わってくる可能性があります。

今の外国語活動はいろいろ工夫されていると思いますが，その形が変わってくるかもしれない。と同時に，学習評価，これはもしかすると最大の難関になるかもしれないと思います。従前の教科と同じような評価がされるのかどうか，できるのかどうか，それによって何が生まれるのか。説明責任という，私，余り好きでない言葉でありますけど，説明責任を数値化，文章で果たそうとする。文章でよさを書いたらいいと思いますけど，文章化は時間的なこともあってエネルギーを使うことでもあります。では，数値化すればいいか。数値化するとなるとさらに大変かもしれません。その背景がどうなのか，その数値の説明をどうするのか，大変なことかもしれません。評価のところに力がかかりすぎて，全体のバランスが崩れて，大事なところ，もっと時間をかけたいところにかけられなくなるかもしれません。そういう意味で混乱するかもと，私，心配性なので心配しています。

さて，結論としての懸念ですけれども，このように考えています。慎重でありたいというのは，いろんなことを考えながら進めていかないといけないのかなということですが，コミュニケーション能力を育成するという観点からは，より重要なコミュニケーション，そして，言葉だけでないコミュニケーション，いろんな研究によって，言葉による，テキストによるコミュニケーションは3割とか4割といわれます。ということは，7割とか6割別の，いろんなコミュニケーションがあるわけですけれども，そこも含めて全体で考えていきたいですし，そうでないと本当のコミュニケーションはできないのではないかと思います。そういうふうに考えていきたいし，その中身ですね。その中身，あるいはその先を考えていきたいと思います。

それから，自己有用感，自己肯定感，自尊感情，学習評価をすることによって，子どもたちの自己有用感，自己肯定感，自尊感情が低下して，ああ，自分はだめなんだというような思いがもし生まれたら，もう即刻やめたほうがいいぐらいに思います。でも，ここは注意しないと，そういう子どもたちが教科のあり方によっては出てくる可能性があって，慎重に進めたいな，どういうふうにすればいいのかなと思うところであります。

教育政策と学校教育の現実ということでいいますと，いろんな教育政策が行われます。学校の先生はまじめで，一生懸命仕事をされていると思います。それはなぜかというと，なぜかというのも変ですけれども，現場にいるからですね。現場にいたら，目の前に子どもがいるわけです。授業をしていること，日々の指導は全部，子どもの成長に関係してくるわけですね。仮に賛成しない政策があったとしても，あるいは効果が高い重要な政策があったにしても，それほどでもない，どうかなと思う政策があったにしても，だからといって，それをすることが子どもたちのマイナスになってはいけない。ということで一生懸命して，そこを何とか成果を上げてと思うわけですね。ですから，成果が上がらないということはないわけです。成果が上がるのです。

でも，その成果の背景にどれだけのエネルギーとか努力とかいろんなことがあるというのはほと

んどみえてこない。ですから，大体どの政策もうまくいっているようにみえるわけですけれども，そこのところはいま一度考えないといけないのではないか。特に小学校英語の教科化に当たっては，質的にも量的にも大きな変革でありますので，そういうことも含めて考えていきたいなと思います。

いろいろ考えてみました。教員一人一人にとっての意味を考えたいというのは，1つの教育の方向性であり，教員一人一人にとってということもありますけれども，学習者一人一人にとって，子どもたち一人一人にとってどういう意味があるのかということですね。そこのところを学習者のほうから考えてみたいと思います。

展望ということで，ではどうするのか。私なりに考えたことを最後にお話したいと思います。2つです。1つは，小学校教育課程の全体の中で考えるということ。もう1つは，言葉そのものを学ぶように考えていくということ。これは大津先生が実証されていることと重ねていいと思います。

まず小学校の教育課程全体の中で考えるということについては，学びの問題から位置づけると，英語の学習を小学校全体の中に位置づけるということなのですが，もう少し具体的にいうと，小学校の学習，1年間の教育課程の中にいろんな教科や領域，4月から始まって3月まで年間計画と呼ばれるものがありますね。その中にあるわけですね。だから，外国語，英語の中だけでそれを考えるのではなくて，教育課程全体の中で考えるということです。それはどういう意味かといいますと，もともと，それぞれのところはそれぞれの教科等の年間計画でつくられたところかもしれませんけれども，一人の学習者がそれを全体として学んでいくわけですね。一人の学習者が何をどういうふうに学んでいくのかということの全体をつかまないと，意味が十分に出てこないのではないかということですね。

何のために英語を学習するのか。英語だけではないです。ほかの教科もそうですけれども。その何のために，の答えの部分は，一人一人別々でいいと思っています。何のために，ということが共通である必要はないと思います。自分は大リーグで野球をやりたいんだということかもしれませんし，いろんな背景があると思います。たくさんの英語と外国語との関連する中身が他教科等の中にいっぱいある。そのいっぱいあるところに橋をかけていくことができるような状況，それは必要に応じて，教員がちょっと水を向けたり，ちょっと橋をかけたり，ちょっときっかけをつくったりしていって。このきっかけに，ああそうかと思ったのは35人いる中の2人かもしれないし，このきっかけで，ああそうかと思ったのは3人かもしれないけれども，いろんな場面でそういうことがあれば，子どもたちは自分にとっての目的をつかんでいくのではないか。それを可能にするには，そういう学び全体をみていくようなことが必要ではないかと思います。これは別に英語だけのことではなくて，全ての教科等についていえるのではないかと思います。

幼児教育に教科はないですね。中等教育では教科というのはすごく大事な役目をして，専門性を身につけること。小学校教育はその間にあります。小学校教育にはその両方の視点が求められるのだと思います。中学校にあわせて教科の観点でみるのか，幼稚園にあわせて全部丸ごとでみるのか。どちらでもない。その両方の視点をみるところに小学校教育の専門性の1つが存在するといえます。そこを考えていこう，つくり出していこうというのが，本日5時以降に設立される学会かもしれません。

評価は，自分との関係や，意味や意義を見出すことにもなり，学習評価については大事なことだと思います。どのような学習評価によって子どもたちが成長するのかが開発されることは大事だと思います。

ちなみに，文脈ということをいいましたけれども，コンピテンシーベースで新しい教育課程を考えましょうといわれますけど，そのこと自体はそうだなと思います。その中でいわれていることで，ここは大事なところ，赤字で。「特定の文脈の中で」という言葉がありますけれども，文脈というのはすごく大事になってくるところではないかなと思います。

言葉そのものを学ぶようにというのは，体験と言語との関係。生活科というのは小学校１年生，２年生にある，具体的な活動や体験を通して学ぶ学習ですけれども，そのときの気づきというのを研究の対象の１つにしています。気づきというのは，体験を通して，諸感覚を通して，子どもたちがいろいろな質感を脳の中に思い描く。それを，質感といったり，クオリアといったりしますけど，そのクオリアが自覚されて言葉になって出るときに，それを気づきと生活科ではいいます。体験と言語の間にすごく強い関係があって，もともとそうなのだと思いますけれども，そこから広がっていって別の角度から言葉そのものについての学習がいるのではないかと思っていたところですので，大津先生のお考えに触れて心強く感じました。その気づきを発展させていくときに，思考とか認識，そして，それと言語との関係ということも出てきますし，人間関係と言語との関係というものも出てくるだろうと，これまで私自身，考えてきたところです。

私自身のことを最初にご紹介しましたけれども，単語が違うだけじゃなかったのだと，そういうところがあります。今思えば，言葉とは何なのかということが，当時，小学校５年生の私には全然理解されてなかったわけですね。もちろん，要素というのはほかにもいっぱいありますけれども，要するに，言葉に対するメタ的な見方が全然なくて，学習されてなくて，でも，それはどこかで必要で，でも，それを母語だけでしようとすると多分難しいのだろうと思います。自由に使えてしまいますから。そのときに外国語と重ねることで，あるいは連携することで，言葉に対する学習が効果的に展開できるし，それによって子どもたちの学習が，ほかの教科等の学習も深まっていくのじゃないかなと感じているところです。

まとめになります。数十年後，今の子どもたちが一人一人，夢や志の物語を今からつくっていくと思いますけれども，それに織り込まれるような小学校英語でありたいなと。小学校英語は，大リーグで活躍するときに，あるいは，国内でいろんなことをしていくときに，英語がこういうふうに関係して，ああよかったな，楽しかったな，友達がいっぱいできたなと感じられたらいいかなと考えています。

以上です。ご清聴ありがとうございました（拍手）

★司会者

朝倉先生，ありがとうございました。

本岡先生，お待たせしました。現場におられてどんなふうに実践されているのか，また，さまざまな方の話を聞きながらいろいろ考えることもあると思いますので，本岡先生，よろしくお願いいたします。

★本岡

Hello, How are you? I am nervous and hungry. My name is Hiroshi Motooka. I am elementary school teacher.……英語はここまでなのですよね。（笑声）英語の学会にご参加の先生方を前にして英語で自己紹介をするという勇気ある登場の仕方をしたでしょう？実は，今回のシンポジストをお受けしたのも勇気ある決断だったのです。私に英語教育について何が話せるでしょうか。最初は，文科省の指定を受けた学校として，文科省の進めようとしている英語教育の内容を説明し，それを基に皆さんに話をしてもらうのかなと考えたのです。ただ，学会の皆さんは私なんかよりもよほどそんなことは詳しく知っておられるわけですよね。それでは，文科省のやろうとしていることが，現場にとってどのぐらい大変なのか伝えるのかなと…批判的にね。すると，先程，柳瀬先生の講演の中で，批判だけして自分の考えを述べないのはだめだと指摘されて…。（笑声）それでも，柳瀬先生が「語り合い」が大切だと言われた事が救いになりました。私にもここでお話しする資格はあると思わせていただいたのです。そして，きっと皆さんが私から聞かれたいのは，25万分の１の教員の考えなのだなということに気づいたのです。私は25万分の１の普通の小学校教員です。その普通の教員が英語教育をすることになった時，何を感じどう取り組もうとするのかを語るのだ，ということですよね。それなので，昨日，説明原稿の校内決裁をとったのですが，「校長先生，すみません。」ここの場は本音の語り合いの場のようなので，原

稿は読みません（笑声）。これも勇気ある決断だと思ってください。

私のことを紹介させてください。この仕事をいただくまでは東広島市の教育委員会にいました。国語と社会の指導主事です。ですから，「文科省研究開発指定校に赴任して英語の研究を進ろ。」と伝えられた時には正直戸惑いました。「なぜ自分が英語の研究を進めるのか」という思いです。初めて所属校に行く時には，少しでも英語教育について語れるようにと勉強もしましたし，自分は英語が苦手なことがばれないように努めました。身が細る思いでしたね。一昨年はげっそりでした。ところが，今日県教委の方に会ったら，随分大きくなったねといっていただきまして…。（笑声）

所属校の先生方も私と同じように文部科学省から英語教育強化地域拠点事業の指定を受けることに不安を持った方が多かったように思います。その理由を考えると３つあったように思います。

１つは自分に英語能力がないということです。「できないのに教える。」という不安ですね。私は先生たちに言ったのです「体育をそんなにできそうにないけど，自信をもって教えているじゃないですか」とね。（笑声）でも，英語は特別なのです。体育は実演しなくても日本語で指導できるけれども，英語を日本語だけで指導し切ることはできないということを皆さん気づいているのです。

２つ目は小学校で英語教育を受けていない不安です。イメージがわかないのです。我々が小学校で教壇に立って教える時の手掛かりは，自身が教えてもらったり影響を受けたりした授業のことが多いと思います。小学校のときに受けた教育，中学校のときに受けた教育。それから，先輩の先生方の指導の姿です。ですから，あの先生みたいにとか，あの時の授業みたいにという材料がほしいのです。

３つ目の不安。それは，小学校教員の指導は英語だけではないということです。今度，特別な教科，道徳も新しく導入されますね。同情しませんか。（笑声）どうぞ学生の皆さん小学校に来てください。一緒に頑張りましょう。現在の教育課程であっても英語だけではないこと実感しています。体育科で水泳指導をした後に，時間割によれば習字がある…それが小学校です。それに加えて英語を行う。教科書も指導書も教具もない中です。「いつ，どうやってやるの？」というような不安です。

更に私がもっと心配だったのは，これらの不安を先生方が口に出し言われなかったことです。小学校の先生は真面目なのです。そして，不安を見せないように実践されている。鎧や兜を身に付けて…。そうじゃないと，子どもたちに勝てない。もっと言うと子どもの後ろの背景に勝てないのです。何が背景かは想像してください（笑声）。結局，私たちは出来ないと言えない状況でこの英語教育強化拠点事業を受けているという本音も見え隠れしていました。

私たちの受けた事業についてもう少し説明します。端的に言うと，新しく始まる小学校英語科（教科としての英語）を他の学校よりも先に教育課程に位置付けて行うということ。英語科が導入された時小学校はどんな授業を行うのがよいか構想し，それを公表して，皆さんからの批正を受けるという事業です。私たちと同じミッションを得た地域は全国に29地域あり，文科省はそれらの学校から集めた実践資料をもとに，教育課程や教科書，教材を決めるのです。ですから，この事業を受けた学校は０からのスタートです。私たちは，文科省の資料に出てくる用語の意味を理解することから始めないといけませんでした。例えば『CAN－DOリスト』。小学校にはこの言葉を知っておられた先生は，ほとんどいなかったと思います。これまで使うことがなかったのですから。もっと言うと，「できる」という目標を設定して授業をやる感覚もピンと来ない。小学校の指導はあまり「できる」ということばかりに力点をおいて授業を行う習慣がなかったのかもしれません。私だけかもしれませんけど…。更に小，中，高一連の系統性を考えて指導をするという事，これらの理解が難しかったように思います。『CAN－DOリスト』を作成することが難しいという事ではないのですよね。そうではなくて，「その『CAN－DOリスト』を教育課程・指導内容・指導方法・教材・評価に関連付けて研究を行うことが難しいのです。何を

やったら，やったといえるのかも分からない，この事業の根幹となるところから理解が曖昧なまま研究が始まったという感覚は否めませんでした。

それでも，次の４つのことは意識統一して研究を始めました。

１つ目は，英語の得意な誰か一部の人の行う研究にしないこと。これから始まる英語科授業は，小学校教員全員に係る内容なのだから。全学級担任が中心で行う授業を研究していこうと決めました。

２つ目は，中学校のまねをしないということ。だって，みんな英語が苦手なのは中学校のせいでしょう（笑声）……すみません…思ってないですよ。今樫葉先生と目が合って，こんな失礼なことを言ってはいけませんね。でも，これまでの学校における英語教育を見直すことは大切ですよね。だから，今回自分たちが行う研究は，小学校らしい小学校の良さが出る内容にしようと考えました。

３つ目は学校教育全体に効果が波及する内容にしようということ。英語の姿だけで見える成果なんか４年間で簡単に出ませんよ。だから，学校教育全体に目を向ける内容を意識するようにしました。

そして最後の４つ目は，研究した私たちが得をする内容にしようということです。授業力の向上ですよね。道徳でも国語でも何かの教科等に特化して研究した時，他の教科に対応できる授業力が身に付く。これが小学校の強さです。日々の全教科の授業力向上に繋げていこう。これらを確認しました。

本事業の指定を受けた１年目，すなわち昨年度実践した内容がこれです。（スライドを見せながら），やっぱり大変でした。おそらく，小学校英語科が始まる時には整理されるものも多いとは思いますが，それであったとしても，全ての教員が足並みを揃えることが大変だということです。学習指導要領にしても，Can-doリストにしても資料を作るだけならば，あちらこちらとコピペすればできます。だけど，そのコピペの意味や根拠は何なのかを，語り合い，共通理解するというのは大変な事です。研究主任として色々なものを提案しましたけども，皆さんと共通理解できているか不安は常にあります。それでもみんなで作り上げていく事を大切にするようにして，１年目の研究を進めました。

２年目になると，日々の授業を含め先生方が主体的に英語教育を進められるようになった気がします。理論的な内容についての共通理解の時間は随分少なくなりました。しかし，先生方が日々授業開発，研開発をする状況は相変わらずです。次の授業の計画１つ１つが研究授業の様…。裏を返すと他の教科については，そんなに多くの教材研究の時間を割けられないということなのですが…。教科書があって，そのマニュアルに沿って教える時間が多くなるのも事実です。ですから，英語をやってすごく思ったのは，大変だけど，毎日の授業を子どもにとって何が良いか考え，真剣に計画する機会を週１回確実に持っているというのは力量を高める上では重要なことだと思います。大変ですが…。

日々の授業については，基本的に担任の先生にお任せしているのですが，授業計画の際留意する内容は３点決めさせていただいています。1つ目は，「英語の生活化を図る」ことを意識するということです。これは今日の主題に係るので，後ほど詳しく説明します。２つ目は，担任の利点を生かすということ。さっき学級で話題になったことが授業の場で生かせるとか，前の時間走って汗をかいたことが授業に生かせるとか，明日こんな行事があるから内容に生かすとか。そして３つ目が，指導者が授業の中で英語を使うようにすること。やはり英語を教える以上は，私たちは英語を勉強しないといけない。でも，授業を離れたところで勉強するのはなかなか辛いから，授業を通して，授業をしながら英語力を身に付けようという話をしています。

これが本校の授業研究の方法です。（スライドを見せて）手前味噌ですが，とても充実しています。参加者がとても問題意識をもって参加されています。そして，日々の授業を振り返って自分の考えを言われます。また，研究授業には教科調査官や大学の先生をはじめ，指導主事，指導教諭等様々

な講師を招聘し様々な方面からご意見をいただきます。授業力を鍛える上で大きな効果を得られています。

先ほど，評価の話が朝倉先生から出ました。ご指摘のとおり評価の研究が一番難しいです。これは，現在，兼重先生に一番時間を割いてご指導いただいていますが，いつも話題になるのは，子どもの生の姿で評価したい，動いている姿で評価したいということです。現在，機会ある毎に動画を撮って，これが子どもの良い姿ではないか，良い発話状況ではないかと論じ合っています。テストの形式にとらわれ，評価のための評価に追われるのではなくて，私たちの授業の結果を判断できるような，授業で目指す子どもの姿として評価できるような方法を，語り合いによって見つけていきたいと考えています。

教員の英語力向上についてももう少し触れます。正直言って，本校の先生たちほど真剣に英語力向上研修をやっているところはないなと思えるぐらい，熱心に様々な研修を試みてくださっています。先生たちは，挨拶や自己紹介，文字の書き方や読み方のような小学生の子どもがやる内容と変わらない事であっても，どう子どもに教えたらよいだろうかということを念頭に置きながら英語の勉強に励んでおられ，現在週１回程度，短時間ですが継続して研修されています。また，英語の専門的な内容も理解しないといけないということで，兼重先生に定期的にご指導いただき，本当に小学校教員が必要な英語の知識や技能って何なのかという事も見極めながら研修を繰り返しています。

さて，前置きが長くなりましたが，今日の本題，「英語を言語教育としてどう指導しているのか」についてお話ししたいと思います。難波先生からは，悩みをしゃべれば良いと言っていただきました。専門的な話は分かりませんが，現場の中で日々考えている内容をお話しします。

これは，文科省が配布している副読本です。(Hi, friends! Plus のスライドを紹介)「文字の認識」「文字と音の関係」や「語順への気づき」を大切にしていこうとするのが国の方向性になっています。私たちは，もちろんそういったテキストや国の方針というものも大事にするのですけれども，兼重先生からご指導いただいている「英語の生活化」というところをもっと大切にするようにしています。「英語の生活化」というのは，一言でいうと，必然性のある場を設けるということです。使う必然性がないような言葉を扱ったところで言葉の教育は始まらないと思っています。ですから，児童生活実態の把握に努め，実態に合った言葉を使用する実の場をつくることにこだわり，子どもが言葉の使い手の主役になるように留意しています。もちろん，目標の明確化を図ることも大切な事だと認識していますから，場面や目的，相手によってどういった言葉の力が育まれるのかという分析は丁寧に行うようにしています。また，そういった言葉の力がどういう過程で身に付くようになるのか定着過程の可視化にも努めるようにしています。そして定着までの過程の中に，言葉を味わうことや，言葉を伝え合う面白さを子どもたちが実感できるような工夫がある授業の計画を設計できることを目指しています。

もう少し詳しく「英語の生活化」についてお話しします。実は，私，昨年の夏に本校の子どもを引き連れて広島大学のサタケメモリアルホールを会場にして授業をしたことがあったのです。勇気ある決断でしょ，これも（笑声)。私，普段は英語の授業をしないのですけど，この時の授業のために，今日も来られている志村先生と一緒に，４月から英語の授業をさせていただいて当日を迎えたのです。

結果は，参加者の皆さんは慰めも込めて「よくやったよ。」「頑張ったね。」と言っていただいたのだけれども，私自身は落ち込むばかりの授業でした。時間も 15 分ぐらいオーバーしましてね。それだけではなくて，学校での子どもの姿とまるっきり違う子どもの姿が出てしまって，挙げ句の果てには，焦りが出てきたために私自身がしゃべりまくるという，本当に課題だらけの授業だったのです。ただこんな思いで授業をしたかったという私なりの言い訳もありましてね，今日は，チャンスだと思って資料をつけさせていただいております。

この授業はミュージカルを英語でやってみよう

というものです。必然性がある場を設けようとする時，ミュージカルをするのって良い手ではないかなと思うのです。なぜなら，子どもはミュージカルを見るのもするのも好きですしね。私，「サウンド・オブ・ミュージック」の「My Favorite Things」が大好きなのですよ。主人公マリアが劇中で述べる色々な言葉を調べてみると，すごく素敵な表現が多くて。調べていくと，日本語を介してなのだけど，イメージが広がってきたり，歌をうたっていると韻を踏んでいることに気付けたり，劇をすれば楽しい人間関係が味わえたり。色々な言葉の学びがあると考えたのです。子どもたちも歌詞とリズムを覚えようとか，あるいは物語の台詞，背景を理解しようとか，自分の台詞をつくり上げようなんて結構喜びましてね。「志村さん，結構喜んでやりましたよね。あのときの研究会はうまくいかなかったけど。」（笑声）。だから，私はそういった子どもの言葉を楽しむ瞬間，瞬間でその言葉の魅力を子どもに伝えてやろうと思って授業を計画したのです。

この授業では特に修飾表現の効果を味わってほしいと考えました。ともすれば新しい英単語を学習する時には，同じ言葉を繰り返し声に出して練習することが多い。言葉というよりも，音の固まりを覚えることが多い気がします。しかし，その言葉がどう表現されかたに目を向けてみると授業内容は変わると思うのです。例えば，rain drops が rain drops on roses になるだけでまるっきり違うものとして，香りまで伝わるようなものとして言葉が感じられる。他にも，Bright copper kettles なんていうのは外国の文化も感じられる。ただの「やかん」ではないことが，写真を見ながら確認できる。「ああ，おしゃれ。銅製のものってこんなに素敵なんだ。」修飾表現の面白さだと思います。

また，歌を歌うことによって韻律的配列も気付けると考えました。英語の歌って，韻を踏んでいるものが多いなと感じているのですが，歌いながらそれを感じるのもよい言葉の学びだと思います。

それから，学会授業当日には，ただミュージカルをするだけで終わらず，ちょっと欲をかいて，学会の参加者に児童がインタビューして好きなものを聞き，その言葉の発音を正しく聞き取ったり覚えたり意味を考えたりしながらミュージカルの台詞の中に即興的に取り入れるなんてこともしてみました。何だか説明を聞いただけだったら面白そうな授業に感じませんか？

この授業の子どもたちの反応ですが，「難しかった」が81％。でも，「楽しかった」と答えた子も93％いました。できたかできないかといったら，できなかったことも多かったのですが，難しかったけど楽しかったといった子ども達。もっと突き詰めてみると，難しいから楽しかったんじゃないのかなと思ったのです。通じないから楽しい，わからないから楽しい，見たことないから面白い。そこには難しさが伴うじゃないですか。簡単だから面白くないということがあるとすれば，難しいからこそ楽しかったということもあるんじゃないかなと思います。

この授業の決定的な問題点は，指導者がやらせたい活動をさせた後に，身に付ける力を追って考えたということ。先にこういう力を身に付けるということがはっきりしていないから，手立てや指導が十分に行えていない。私の国語なんかいつもそうことが起きているのですけど，指導者が次にこれをやりたいと思うと，とりあえず活動を計画し，子どもには何となくこんな力がつく程度で授業を進めてしまう。そして，授業が終わった時，なんか楽しそうだったからきっといろんな力がついていると錯覚してしまう。そういう傾向はこの英語の授業でも間違いなくあって，私自身が，何の力を付けたのかきちんと説明をできないのです。英語についての理解が浅いので，国語以上にその傾向は強い。これは問題だと感じています。先生方には，逆向きの授業設計をして下さいと話をしているのに自分の授業がそうなっていかないことについては，もっと勉強や経験が必要だと反省しています。

さて，英語の授業をしてみて思うことなのですが，英語の授業では即座に子どもを評価できない自分がいるということを感じています。そして，それは私自身に英語力がないことに起因していると思っています。子どもの発する言葉や英語への

気付きに対して直感的には面白いことを言っていると思っても，それが一体どういう面白さなのか説明できない自分。子どもの良い聞き取りや発音に即座に良さを述べられない自分，子どもたちに身に付けるべき英語能力がどういうものなのかをもっと理解しないといけないと感じています。また，英語能力が不十分だということは自信を持って子どもの前に立てなくなることも実感しました。子どもの評価を即座に出来ないという事は，子どもが学習主体となる活動を計画し指導しようとした時に大きな問題だと思っています。しかし，その要因が自身の英語能力ということになれば一朝一夕には解決できないとも感じます。寝ずに勉強しろといわれれば，ということでしょうか。だとすれば，ちょっとしんどいです。もっと効果的な方法が提示されたり，あるいは何年か計画でということであれば分かりますが。

本当に長い話になって申しわけないです。しかし，難波先生から展望も話せと言われたのです。私自身の考えを言う自信はないのですけれども，『にほんご』という本を紹介してそれに代えさせていただきます。私は学生時代に出合ったこの本が大好きで，国語の研究を始めた時にももう一回読み返したような本です。今回，英語の研究を進めるときにもこれを読み返してみたのです。この本は，1年生の子どもが日本語を学ぶという時に，これまでの言語教育の在り方を見直すために出された本というような捉えをしていて，この考えをもう一度見返すことは，絶対ヒントになるなと思ったからです。

この本の後書きには6項目で留意すべき事が書いてあり，今日はこれを紹介させて下さい。

1項目にはテクストの捉え方が書かれています。教科書を通して何を教えるのかを深く理解する教材研究の大切さ。指導書では明日このページだからこれを教えるというような発想から脱却することからやらなければいけない。冒頭でも言いましたが，教科書ができてしまうと，その指導すべき内容を理解しないままマニュアルに沿って教えるようなことが生まれがちです。今行っている教材の分析や解釈を教科書があったとしても行うことが重要であるという事，これは大切な心がけだと思います。

2つ目は，子どもの中にある言語経験を正しく把握するということ。これは文法的にとか，言語学的にとかという難しいことをいっているのではなくて，子どもはこんな言葉の力をもっているのだから，こんな感じに伸ばしてやりたいという感覚的なものでもいいと思っています。子どもたち自身には生活の中で身に付けている言語，基盤になるものがあるわけで，そこを拠り所にして英語をやっていかないといけないというのは，大津先生のおっしゃることに全く同感です。

3つ目です。これは私のこだわりでもあるのですけど，正しさだけに執着する英語はしたくない。やっぱり豊かさに触れてこその言葉じゃないのかなという気がしています。ただし，豊かさに触れるって，音声指導だけでできるのかなということがなかなか難しいところで，ここは解決先が見つからないのだけれども，言葉は豊かさの方がより一層重要な学習ではないかという気がしています。

それから，4つ目が文体への気づき。これは「日本語の文体に気づける機会にする」と書いたのですけれども，英語の文体って何のか，ちょっと私にもわからない中でお話ししますが，はっきりしているのは，国語を教えるときにおいて，例えば和漢混交文，あるいは和文であるとか漢文はその魅力があるし，もっというと，方言であるとか共通語とかのおもしろさってあるじゃないですか。そういったものはきっと英語にもあるんじゃないのかなと思っていて。ただ，こういったことに目を向けることが果たして小学校で可能なのかというのも，また疑問としてあります。

5点目なのですが，この本には，「子どもの生活の中には，読み聞かされた本とか，たくさんのお話がしみ込んでいるはずです」と書かれているのですね。でも，英語にはないわけですから，いい言葉というか，いい教材というか，そういったものに出会わせる事が小学校では大切で，例えば偉人の言葉であるとか，ストーリーであるとか，すてきな詩であるとかすてきな歌，そういったものに触れるという発想があってもいいのかなと。言

語経験を補完する必要性というようなことを思いました。

最後6点目です。「異国・異文化の言語を使用して交わることの難しさを扱う」と書いてありますが，全くその通りで，先ほどもいいましたように，日本語ではない言葉のおもしろさを感じさせなければならない。そうでなければ英語をやる必然性は生まれないとも思っています。しかし，子どもたちは日本語があふれている中に生活して，家に帰ったら英語を使うことはありません。余程工夫して授業を計画しなければ本当の意味での異文化や異国の言葉の難しさを感じることは出来ないと思うのです。もっというと，子どもたちが難しいことをした時には，難しいことをやったご褒美をあげるべきだと思っていて，そのご褒美の部分が達成感や満足感を味わわせるというような情感的なものだけでなく，「こんな事が出来るようになった。」とか「こういう対処方法を身に付けた。」とか「こういうアイテムを身に付けた。」というようなきちんとした英語能力として言い切れることが大切さと感じています。これから小学校教員が研修すべき内容なのではないかと思っているところです。

本当に恥ずかしいです。話をしてみて自分が無知なことが改めてよく分かりました。無知なのにもかかわらずただ勇気だけで登壇したので，さっきの「にほんご」の解釈も間違いかもしれません。それでも何かのきっかけになれば良いと思って話をさせていただきました。本当にありがとうございました（拍手）。

★司会者

ありがとうございました。少しクールダウンしたいと思います。今から10分休憩をいたします。

（暫時休憩）

★司会者

まず最初に，大津先生から3人のシンポジストの発表に対してコメントをいただきたいと思います。お願いします。

★大津

3人の話を伺って，3人それぞれの語り口で，語りのおもしろさにはとても感銘を受けたのですが，難波さんの意図に合うかどうかわからないけど，このあとは和やかに過ごすよりも，少しとげとげしくやるのもおもしろいかと思うので，本音を語らせていただきます。話を聞き終わった時点で，私の頭をよぎったのは，「本当に小学校で英語をやらなきゃいけないのだろうか？」ということなのですね。これは英語活動についてもそうだと思うのだけれども，まして教科として本当にやらなきゃいけないのだろうか。

実は，休憩の間にある先生が来てくださった。10年ほど前に，英語活動というか，外国語活動をやるかやらないかということが話題になっていた頃，私は前にいた慶應義塾大学で小学校英語に関するシンポジウムのシリーズを開いていました。その先生はその第2回目に来てくださっていたのです。さきほど，その先生が開口一番，「あのときの状況とほとんど変わってないんじゃないでしょうか」とおっしゃった。私も全く同じ気持ちです。「もう一ラウンドやらなきゃいけないのかな」ということと，「これじゃ，あと10年，20年死ねないな」と強く思いました。

3人の方にお聞きしたいのは，本当に小学校に教科としての，教科に固定したほうが論点がはっきりすると思うのでそうしますが，教科としての英語を導入する必要があると思っておられるのか。あるいは，本音ではそうは思ってないのだけれども，そういう方針が打ち出されようとしているのだから，もうそこは変えようがないのだから，その中でどうしようかということを考えておられるのか，どっちなのか。

私自身の答えははっきりしていて，後者でしかあり得ないのですね。10年前には，外国語活動という形で落としどころをみつけたわけです。今回もそれに似たような何か落としどころをみつけなくてはいけなくて，その落としどころは何かといったらば，さっきは英語教育と国語教育の一体化と言いましたけれども，多くの子どもたちの母語である日本語というものを生かした英語教育，妙な

言い方に聞こえるかもしれないけれども，そういうものを実現させるように努力して，そういう形でこの危機を何とか乗り越えるようにしなきゃいけないんじゃないだろうかと思います。

本岡さんとは初対面なので，信頼関係ができているかどうかわからないのだけど，信頼関係ができていると思って言わせていただくと，これ，揚げ足をとるわけじゃないけれども，「必然性がある場を設ける」とおっしゃった。「必然性のある場」というのは，「設ける」んじゃなくて「生じる」もので，「設ける」という発想をしなきゃいけないところに，小学校に教科としての英語を入れることに，そもそも無理があるんじゃないのだろうかと私は思うのです。

もう1つ，「言葉を味わうおもしろさ」の実感とか，「言葉を伝えあるおもしろさ」の実感とおっしゃったけど，どうしても私にわからないのは，なぜ母語じゃいけないのか，なぜ英語を導入しなきゃいけないのか。もちろん，英語という，母語と同質だけれども違うものを導入することによって，そこに広がりが出るというところはよくわかります。でも，それはあくまで補助的なものであって，しかも，英語という特定の外国語に限る必要もない。どうしてそこで英語にこだわらなければいけないのだろうかという疑問が残っているのですね。そこのところはとても本質的で大きな論点だと思うので，ぜひ皆さんのご意見を伺いたい。

それから，柳瀬さんのお話ですが，「子どもと語り合う授業」とおっしゃったけれども，そのことと小学校での教科としての英語教育というのがどう結びつくのか。そんなものは英語をやらなくたって，母語で語り合うのが一番いいんじゃないかと思うのだけど，どうなんでしょうか。

朝倉先生のお話については賛同申し上げたい点を1つ。「格上げ」という話がありました。さっき報道関係とおっしゃっていたけど，もちろん，報道関係者も「格上げ」というのを使ったのですが，小学校の英語に関しては，結構重要な動きをしているJ－SHINEという団体があって，そこの会長が，教科化されそうだという動きを受けて，はっきりと，多分今でもネットに残っていると思うのですけど，「格上げ」だといって喜んでおられました。つまり，活動から教科になってということを格上げと捉えているのは必ずしも報道関係者だけじゃなくて，その中核にいる人たちの中にもいるのです。そして，それは結構，その人たちの本音があらわれたというところじゃないかなと私は思っています。

まだいいたいことはありますけれども，このくらいにしておかないと時間のうちに終わらないで，乱闘になってしまうといけないので（笑声）。

★司会者

ありがとうございました。まずお一人お一人の方に，小学校英語教科としてどうなのか。賛成なのか，反対なのかについてと，もう1つ，それぞれの方への質問やコメントがあったと思うので，それに対してできるだけ的確に答えていただいていいですか。

★柳瀬

僕に今個人的に言ったのですか（笑声）。

★司会者

いいえ。では，柳瀬先生，お願いします。

★柳瀬

小学校の英語教育の教科化を実施することに賛成か反対かということでいうと，賛成，反対という以前に，現実的には非常に困難です。きちんとした研修機会も保障されていない25万人の教員に4年で急に変われというのは，明らかな無理筋だと思います。しかし他方で，仮に政権が変わったとしてもそれくらいで，小学校英語教育という路線が変わるとも思えません。また，10年前と状況がほとんど変わってないじゃないかと。それもその通りだと思います。しかし，本岡先生が，「じゃあ寝るな」ということですかとおっしゃいましたけれども，教師に，普通の勤務の中に研修時間を設けてあげないと，つまり，人的な余裕を作り出さない限り，教科化は無理筋だと思います。人的余裕を得ることは財務省との闘いです。文科はこれに関してそれなりに闘ってくれていると思いますけど，そこをやる。財務省との闘いと言いましたけれども，文科をバックアップするためには市民の理解を得ないといけない。そのためには，教

育という営みがどういうものなのか，小学校英語教育はどういう営みであるかということを私たちがきちんと伝えなければならない。そしてマスコミも「幼稚園児が芋掘りをしました」みたいな調子で，「小学生が楽しく英語を学んでいます」みたいな報道ばかりじゃなくて，小学校英語教育の問題点もきちんと取り上げていただきたい。

ですから，第１の質問に関しては，僕は無理筋だと思いますけれども，一方で，じゃあ今から変えるなというのも無理筋だと思っています。だから，矛盾だらけの現実にどう対応するかというご質問だと思います。

★大津

だからと言って，現状から考えたら研修についても十分な配慮がなされるとは思えない。でも，それでも，小学校の先生たちはそれに対応しなきゃいけない。どうしたらいいんでしょうかね。

★柳瀬

先ほど本岡先生がご発言なさいましたよね。「原稿を読みません」と。この会場に校長先生がいらっしゃるかどうか知りませんけど，ぜひそれを認めてあげてほしいのですよ。今までだって研修はなかったかというと，そんなことないのです。でも，そのときに，先ほど言ったみたいに，偉い，偉い英語の専門家の方に「教えてください」というふうな形で，自分の本当の弱みをみせられないような形の一方通行の，だから，ある意味で研修になっていない研修が多かった。そこを変えるだけでも，つまり，我々の意識，あるいは授業研究のあり方，それを変えるだけでも，現在のリソースを使うだけでも多少の変化は起きると思います。

本岡先生ばかりを持ち上げるわけじゃないのですが，あの発言でこの会の流れも随分変わったでしょ。こういう研究会って幾らでもあるでしょ。でも，そういう研究会などで，ちゃんとお互いが弱みをみせられるようになり，共同体意識や当事者意識を高めるだけでも僕は変わっていくと思います。

★司会者

じゃあ，朝倉先生お願いします。

★朝倉

教科化について賛成か反対かということになると，これは逃げのように聞こえるかもしれないのですが，今，教科という概念がちょっと崩れつつあるのではないかなと思います。それは特別の教科，道徳というのが生まれましたように，無理やり……難しいですね，言葉がね。文字どおり，特別な教科の強化ですよね。そういうふうにしてくると教科の概念が崩れつつあって，そういう中でいうと，教科というものを広く，やわらかく考えるならば，教科化というのも，賛成ではないけど，反対はしません。

あえて申し上げるならば，大事な部分もあると思うのですね。その大事な部分というのは，今の社会にあって，外国語を子どもたちが学んでいくということは，子どもたちの可能性を広げることにつながるのではないかと思います。子どもたちの可能性がどんな形で，どういうふうに広がるのかということについてはまだまだ検討の余地はあると思いますけど，そういう論点から考えると，広く，やわらかい意味で教科というものをとらえ，どういうふうな展開をすることが子どもたちの可能性を広げることになるのかなという観点で自分としては考えたいなと思っています。以上です。

★司会者

何かしゃべりたいのですか。

★大津

一言。

★司会者

はい，どうぞ。

★大津

小学生たちが外国語と触れ合うことによってこころの可能性が広がっていくということについては，私は全く否定しないし，そのとおりだと思います。ただ，私が常に懸念しているのは，触れる外国語がほぼ英語と限られていることと，本岡先生がおっしゃったように，小学校の先生方がそれに対応できるかといった，とても難しい現実がある。そうなったら，両者（英語以外の外国語も考慮した真の意味での外国語活動とほぼ英語一辺倒

の英語活動・英語教育）をてんびんにかけて，どっちをとるかと言われれば，私は，どう考えても後者は採れないなと思うのです。

★司会者

じゃあ，本岡先生，お願いします。

★本岡

大津先生が，さっき人間関係ができてないからといわれて，あっ，人間関係ができるチャンスなのかなと思って。とすると，ここは余り反対の意見をいわないほうが……（笑声），いろいろと探っているところではありますが。ただ，はっきりしているのは，今日この話をいただくに当たって，大津先生の本をいろいろ見させていただいて，大共感で，ほかの先生方と一緒に，そうだよねと言っていた。でも，それが果たして教科の反対をしている立場なのかどうかというと，極めてクエスチョンマークで，我々としては，その教科を賛成するとか反対するとかというスタンスに立たないまま教科をやっているという立場ですから，はっきりしているのは，英語をやっている我々から，反対だから，無くなる見込みがないものを反対するのは言いたくない，という気持ちを理解していただきたいということです。

もう１つ，母語が大事だというのは大共感ですが，じゃあ国語は母語を大事にした指導が今できているのということをもう一回考え直すべきで，時間数があって，教科書があって，しかも解説書がしっかりしていればそれができているのかというと，結局は教師の指導力や授業力だと思うのですね。みんな大村はまになりたい時期ってあったじゃないですか。でも，大村はまなんかになれなかったわけですよね。理想を追求すれば，大村はまのように２年前から，３年前からずっと子どものそばにいて，何の言葉に興味があるのと聞きたいところですけれども，濱田純一先生がお書きになっているように，小学校現場において国語をよりよくしていこうと思ったときには，できる範囲の中で子どもたちに必然性のある場を設け，そして，45分で勝負する中で，子どもたちに，やったとか，できたとかという，もしかしたら錯覚かもしれないものを積み上げてやるということだろうと思っています。

となれば，今英語をやっているという立場からいうと，英語が入っても，きっとそういうことは小学校教員もできるのではないかなという立場に立ちたいので，ぜひその方法を教えていただきたいなということを感じています。ごめんなさい。逃げ道かもしません。

★大津

私もいい人間関係を築きたいと思っています（笑声）。だけど，さっきお話しした日本語を生かした英語教育という道というのはぜひ探っていただきたいと思うし，どう間違えても，英語だけで授業をするだなんていうことを基本的な方針にはしてほしくない。

★司会者

それでは，皆さんから質問，ご意見，あと30分もないのですけれども，いただきたいと思います。早目に手を挙げて，早目に意見をいってください。できれば短目にお話ししていただきます。では，お願いします。はい，どうぞ。

★山口県の高校にご勤務の先生

山口県の高校に勤めております●●といいます。今日はありがとうございました。

大津先生，柳瀬先生，本岡先生の話はまた別なお話をお聞きする機会があるかと思いますけれども，朝倉先生はお話をする機会がないと思いますので，せっかくですからちょっとお聞きしたいのですけど，東雲小学校の校長先生をされていまして，私が今考えているのは，外国語活動，英語科にも関連するのですけど，昔は，読み書き，そろばんとか，二宮金次郎とかで基礎を徹底的に教え込むというのですかね，それをやって，ノーベル賞が世界的にもかなり出るような教育を今まで蓄積してきたと思います。昔も右往左往していたのかもしれませんが，今，外国語活動も含めて右往左往している状況です。

小学校の校長先生をされている立場からして，小学校の小学生に最低限何をさせなきゃいけないのか。それも，エリートの人を育てるんじゃなくて，やんちゃな子を含めて，今だったらアスペルガーとかADHDとかいますので，昔もいたかもしれな

いですけど，そういう子も含めて最低限何を身につけなきゃいけないかということを，教育全体の場でお聞きしたいと思うのですけど。

★司会者

じゃあ朝倉先生，お願いします。

★朝倉

ご質問ありがとうございます。小学校教育の段階で全ての子どもがぜひこうあってほしいということでいいますと，体験，経験です。実体験というふうにいったほうが正確かもしれませんけれども，その体験，そして，それがつながっていく経験には，バーチャルでない，実際の，現実の自然と直接触れ合い，かかわることや，生身の人間と十二分に触れ合い，かかわることを小学校教育ではぜひやりたいなと。ただ，これは学校の方針ということとは別に個人の考えで発言しておりますので，個人として考えております。

こういうことでよろしいでしょうか。

★司会者

先ほどの朝倉先生のお話ともつながるところかなと思っています。このことと，多分，英語教育とはつながるのでしょうね。

他にいかがでしょうか。じゃあ，前の方からどうぞ。

★広島市の小学校にご勤務の先生

広島市立○○小学校から来ました●●と申します。今日はとても楽しかったです。教員3年目ですので微力なのですが，大津先生に，小さい，小さい抵抗をさせていただきます。

先ほど大津先生が，どうして母語じゃいけないのかという話をされていましたけれども，朝倉先生が，自由に使えないという壁によって言葉が深まるとおっしゃった。それから，本岡先生が，難しさの中に楽しさがあるというのに僕はすごく共感をしていて。例えば，5年生の男の子を教えるときに，「彼は格好いい」「He is good」といいたいけど，そのgoodという言葉が出てこないときに，何ていえばいいかな，He is good baseball playerと一言いって，周りの者たちも，ああ，確かにと。その後に，結局言葉が出てこなくて，「……」みたいな，たったそれだけでも，言葉というもの自体も変わるのかなと思っています。雰囲気による，学校経営につながるようなことだなと思うのです。英語というのは学活に似ているかなと思っていて，5年生や6年生の子どもたちが，日本語で「彼は格好いいんです。すごい野球選手なのです」ということは普段はなかなかいえないと思うのですけれども，英語だからこそいえるというか，それによって学級全体の雰囲気もよくなるというのは個人としては感じています。

ただ，先生いわれるように，評価の部分に関すると，これをどう評価するのかということになって……。済みません，話がよくわからなくなってしまいました。

★司会者

外国語だから表現できることって確かにあると思うのですね。日本語だったら恥ずかしいことが，I love youといえるとか，Je t' aimeといえるというのはあるような気がして。外国語は学活と似ているとおっしゃいました。ものすごく衝撃的でおもしろい言葉だったと思うのですけれども，その辺，大津先生。

★大津

ありがとうございます。せっかく先生になったばかりで，いろんな努力をされている，その努力を否定するつもりは全くないのですけど，あえていわせていただくと，今，難波さんがおっしゃったことも含めて，小英論争のかなり初期のころから直山木綿子さんがそれに似たようなことをずっと言っているのです。外国語というのは母語に比べて，使うときに認知的な負荷がかかりますよね。つまり大変なわけです。だから，その大変さが，むしろ言葉に対する，私の言い方だったら，気づきを促すのだということをずっと言っていたのです。

例として，子どもたちは「ありがとう」というのを口に出して，友達なんかになかなかいいにくいけれども，thank youという表現を一度習うと，感謝の気持ちをthank youという表現にのせて相手に伝えられるというようなことを言っていました。ただ，それを聞いたときからずっと違和感をもっているのですね。本当にそんなものなのだろ

うか。京都だったら，せっかく「おおきに」といういい表現があるのに，何で感謝の思いをそれにのっけないで，thank you だなんて，よそよそしい異物にのっけようとするのか。なぜ子どもたちにそんなを体験させなきゃいけないかというのが，私はわからないのです。

でも，それはそうじゃないとおっしゃる方もきっとたくさんいるかと思うので，ぜひ教えてください。私は，教条的に自分の考えだけで，あとは全部だめとは決して思っていないので，おまえの考えは違うというのがあったら，ぜひ教えていただければうれしいです。

★司会者

今，フロアの方が手を挙げているのですが，いいですか。今，違う意見が出たと思うのですけど，両方あるんじゃないかなという気が私はしているので，ちょっとそれ，置いておいてください。

では，後ろで手を挙げられていたので，お願いします。

★福山市の小学校にご勤務の先生

福山市立○○小学校の●●と申します。大津先生に１点質問があります。今回の落としどころとして日本語を生かした英語教育ということをいわれました。大津先生にとりまして本意ではないかと思いますけれども，母語を生かした英語教育の具体的な姿を１つでも２つでもご教授いただければありがたいです。よろしくお願いします。

★大津

具体的な話については，私自身の本で恐縮ですけれども，窪薗晴夫さんという方と一緒に書いた『ことばの力を育む』（慶應義塾大学出版会）という本の中に具体的な例がたくさん挙げてありますから，照していただけるといいと思います。

それで，限られた時間で紹介できる，それほど難しい議論を必要としない例というのであれば，複合名詞でしょうかね。私が例としていつも出しているのは「温泉まんじゅう」なのです。ただ，おとどい奈良教育大学の附属小学校での報告をうかがったら，温泉まんじゅうを知らない子どもたちもいるので，温泉卵でやってみたというのです。

何がおもしろいかというと，「温泉卵」という語がありますね。これを，２つに分けてくださいというと，小学校の１年生でも２年生でも，「温泉」と「卵」と分けられます。そうすると，「温泉卵」という語は「温泉」と「卵」という２つの語が，今いった順番に並んでいる。では，それをひっくり返したらどうなるかなと尋ねます。「卵温泉」ですね。そこで大体小学生の場合は爆笑になって，「卵温泉？！」だなんて言うのだけれども，先生が「「卵温泉」というのはどういうものだか考えてみようね」と言ったり，グループディスカッションをさせたりして，卵温泉というのはどういうものか，絵を描かせてみる。描かせてみると，例えば，湯船の中に卵が浮いている温泉だとか，温泉卵が名物の温泉だとか，いろんなことものが飛び出します。

そこで子どもたちが気がつくことは，２つの語を並べて新しい語を作ると，その並べ方によって意味が変わる。語順の重要さに気づきます。

さらにもうちょっといっちゃうと，「卵」と「温泉」，その順番に並べただけなら，「たまご」と「おんせん」ですから，「たまごおんせん」になるのですね。だけど，実際はそうはならない。「たまごおんせん」といったらおかしくて，「たまごおんせん」になる。ここで，順番を変えると意味だけでなくアクセントも変わるということに気がつくかもしれないし，もうちょっと進んだ子どもだったら，ほかの例も考えながら，１つの語の中でアクセントが高いところから低いところへいって，また高いところへいくというのはだめだというような気づきもある。

そのあたりを利用して，語順の重要性を理解する。そして，日本語だけでなく英語でも語順がとても大切でという話にもっていく。ただし，日本語でも英語でも語順は大切なのだけど，その大切さのもっている意味が日本語と英語では違う―個別性の話ですね―という具合にもっていくとうまくいきます。

★司会者

よろしいでしょうか。大津先生の話を聞いていると，昔でいっている言語事項，今でいえば国語の特質に関する事項がものすごく魅力的なものに

なるはずだという，ものすごく突きつけられた感じがするのですね。

他にいかがでしょうか。はい，どうぞ。

★広島県立の特別支援学校にご勤務の先生

所属は，広島県立○○特別支援学校の●●といいます。免許は英語なので，長年ずっと高校の英語を教えまして，中学校のほうでも１年から３年まで教えていました。今日の話を聞いて，自分でも英語教育に関連して感想を言わせていただきたいと思います。

中学校の英語を教えてみてびっくりしたのが，中１はABCから一応入ることになるのですけれども，この年度のおしまいに進行形から過去形まであって，結構１年生のところで非常にステップアップしているのですね。そこで文法的な基礎もやらなきゃいけないし，あと，テストなんかに発音記号とか文法用語がばんばん出てくるのです。あと，ワークブックという補助教材もあるのですが，そこにも文法説明がいっぱいありますので，やはり英語だけの授業というのはちょっと無理があるんじゃないかなと，実際教えてみて思いました。

やってみて，小学校の先生にやってほしいなと思ったのが，大文字，小文字が書けるようになっていったら，中学校のスタートが非常に楽じゃないかなと思いました。それから，曜日，月について，書けなくていいですから，英語ではどういうのかを知っていたら非常に中学校では助かるんじゃないかなと思いました。

小学校の英語というのは非常に難しいと思います。実際，小学校の先生は放課後に教材研究をしなければいけないと思います。また，自分自身が英語教育について大学とかで習ってないと思います。そうなるとやらなければいけないということで求められるのは大きいかもしれないですけれども，小学校の先生が今まで自分が中学校，高校で習った英語でできる範囲，余り無理をしない程度でやっていけばいいんじゃないかなと私自身は思います。

今年ちょうどオリンピックがあります。オリンピックの国の名前の言い方も日本語と英語では違います。英語ではこう言うんだね，例えばいろんな競技の英語の言い方，それも英語ではこう言うんだね，そういった身近な行事を通じて英語に触れ合う。そういったことで無理のない程度で工夫されたらいいんじゃないかなと今日は思いました。以上です。

★司会者

ありがとうございました。本岡先生，今のコメントに対して一言お願いします。こういうふうにしたらどうだという。

★本岡

ありがとうございました。合理化を図ることはとても大事なことだと思っています。中学校１年生に行って，何で同じテキストを使えば合理的なのにやらないのだろうとか，クラスルーム・イングリッシュ，同じものを使えばいいのになとか，文字指導，ここまでいっているのだからそこからやればいいのになというのはわかるのですけど，ただ，小学校が中学校のスタートを円滑にするために英語をやるという発想には，ちょっとうーんと正直思ってしまいました。先生，ごめんなさい。

小学校って，子どもがその日その日をすごく楽しんで帰ってくれることを何より大事にしているところがあって，何となくそういう部分と話がかけ離れちゃったような気がして，ちょっと残念だなと思って。小学校もそのぐらいやっておけばいいんじゃない，といわれたような気になったのは僕のせいでしょうか。時間がないからしようがないのですけどね，というような気になっちゃって，それこそけんかになってはいけないなと思いながら。むしろ，中学校でやるべきことはちゃんとやっていただかないといけないだろうなと思うし，むしろ，その前に小学校がやるべきことを見出すべきだと思っていて，それは中学校でやるべきこととは違うことでありたいというのが，私の考えです。

★司会者

小中の連携をするときに，さっきの接続教育の話もありましたが，言っている意味，思いは一緒なのだけど，違う言葉で表現するので面倒くさいというのがあって。そういうことです。

もうお一人ぐらい，いかがでしょうか。はい，どうぞお願いします。

★広島県内の小学校にご勤務の先生

○○小学校の●●と申します。今，広島大学大学院の派遣研修で来ております。私も本岡先生と一緒で，全くの畑違いの人間でして，5，6年前，「英語ノート」の試作版の拠点校から始まっております。現場のみんなと一緒になって，こうしていこうかとか，こういうふうな活動をしていこうと，現場で切磋琢磨しながら積み上げてきたと思っています。

今後の計画をみたときに，私は，あっ，自分はもうお役御免だなと思いました。それが5，6年の教科化に向けて，英語に対する専門性があるとか，堪能な教員が指導に当たるというふうなフレーズをみて，英語ができない自分たちは，ここまで積み上げてきたのだけれども，3，4年生の専門になるのだなと，正直感じたところがあります。でも，本岡先生と同じように，現場の教員は自分たちの英語力も磨いていきながら何とかやっていきたいという思いを相当もっている人もたくさんいると思っています。自分は極端かもしれないですけど，お役御免だなと思ったような現場の教員もいると思うのですけど，そういった我々のようなモチベーションを今後どういうふうにもちながらやっていけばいいのかなということをお聞かせいただきたいなと思って，発言させていただきました。よろしくお願いします。

★司会者

ありがとうございました。今のご発言も含めて，まとめのところに入らせてもらってもいいですか。順番は，申し訳ないですが，逆にしまして，本岡先生から朝倉先生，柳瀬先生という形でいっていただきたいと思いますので，では，トップをお願いします。

★本岡

失礼します。先ほどは失礼なことをしたんだなと思って反省しています。ただ，そのぐらい片意地を張らないと今スタートを切れない。どこかでプライドを持たないとやってられないという，小学校教員の気持ちは大事にされるべきかなと。専門性を持ってないと，先ほど質問された先生の言葉を返すと，教えにくい教科なのは間違いないだろうという前提に立ちながらも，教科としてやれといわれたときに，専門性を超えたところで勝負できるようなものが小学校の文化にはあってしかりなのかなと。そうじゃないと，それこそ，国語も，専門的な人間が教えることの魅力をもっともっと持っていないといけないはずじゃないですか。国語を専攻した人が，母語である国語は，大学で4年間勉強した分だけ自信をもって教えられるのですかというと，決してそんなことはなくて。母語の強さというのは分かっているのですよ。でも，英語は4年間やっている人でないとできないものというのは補完をしてほしい。それは，もしかしたらICTなのかもしれないし，人なのかもしれないし，そういう専門性をもった人が一緒についてその部分をやるというシステムなのかもしれないし。だけど，小学校教員がやりたい授業は，それによって，英語の専門性がある人でないとできないものだととらわれている，鍛えてトレーニングして，違うのかもしれません，ごめんなさい，そんな即興性の高い学力をつけるようなものが果たして文化として合っているのかなということを考えたい。

ですから，私たちは受けとめないといけないので，特別な教科，道徳も英語も，受けとめていった時には，自分たちの目の前の子どもをみる。そして，子どもたちにとっていいことをやりたい。それは，できれば小学校の教員がやりたいことと国のやっている方針が合致するようなところに調整していってもらいたい。それは決して英語のプロパーじゃないとできないものじゃないんじゃないかという立場に立ちたい，というぐらいです。ごめんなさい。

★司会者

では，朝倉先生，お願いします。

★朝倉

今日こちらに登壇させていただいた趣旨からすると，私からは，今のお話とも関係するのですけれども，今日は小学校英語がテーマであったわけですけれども，子どもたちは英語だけをやるわけ

ではもちろんない。国語もやるし，社会もやるし，理科もやるし，給食も食べるし，委員会活動もするし，休憩時間もある。そういう小学校教育全体の中で考えていきたい。小学校英語もそうだし，他のこともあわせて考えていきたいなと思います。

それを考えていく場として，考えることは小学校教育の専門性とは何かということを突き詰めていくわけですし，小学校とはどういう学校であればいいのかということや，その中で教職員がどういうふうに力を合わせることが大事なのかなと思います。また，学校現場と研究者がどういうふうに協力するのかということにも繋がると思います。以上です。ありがとうございました。

★司会者

柳瀬先生，お願いします。

★柳瀬

まず認めたいのは，我々は矛盾だらけの現実に向き合っていること。これをまず正面から見据えた上で，私が言いたいことは，2つが必要であるということです。1つは，弱みをお互いに認め合うことができる共同体，あるいは当事者の集まり。教員同士も弱みを互いに認められる集まりが必要です。なぜ弱みが出るかといったら，現実が矛盾だらけだからです。だから，弱みを隠したって，ごまかしだけにすぎないと思います。だから，弱みを認め合える共同体が必要です。その共同体で認め合うということ，つまり，多面的に理解し，お互いに，これはいいんじゃない，いや，それはもうちょっと，というふうな対話を促進する。

弱みを認め合う共同体による教育の運営は，何と対立しているかいえば，エビデンスによる一元的な教育管理です。一元的な数値にしないとエビデンスにならない，エビデンスで管理しない限り教育はダメになるという考え方は暴走すると怖いと思います。

ですから，弱みを認め合う共同体による責任をもった認証。一元的なエビデンスに代わる，あるいはそれを補う，多元的な認証が必要です。これが二つ目の必要なものです。

この2つを推進するためには我々の認識を変えなくちゃいけない。研究者及び指導主事，そういった人たちが大幅に認識を変えなくちゃいけないと思います。

★司会者

では，大津先生，お願いします。

★大津

私は子どもが大好きです。最初に申し上げたように，自分の一番の研究関心としては子どもの母語の獲得にあるのですけれども，そういう道を選んだのも，やっぱり子どもが好きだからということがとても大きかったと思います。ただ，10年ほど前ぐらいから小学校の英語教育の問題にかかわるようになって，小学校の先生がたと接していくうち，私は小学校の先生はできないなと思うようになりました。

それは，最後の発言者の方がおっしゃったような英語活動に対する小学校の先生たちの努力とそれを支えるエネルギー，これは私にはないと告白せざるを得ない。不安を覚えていた先生たちがたくさんいたわけですよね。そのときにそうした先生たちに用意されたキャッチフレーズは，「英語学習者のモデルとしての学級担任」。だから，英語なんかできなくたっていい，子どもたちと一緒に英語を学んで，間違えたっていい。学んでいく姿を子どもたちにみせるのが学級担任の役割だということが言われました。私は随分いかさまだと思ったのですけれども，先生たちは，それをいかさまだということではねのけてしまうことをせず，長い時間をかけてエネルギーをかけて，英語活動文化を築き上げた。そうしたら，今度は教科にすると。英語活動はなくなったわけじゃなくて，中学年に引き下げたというけれども，小学生を知っている人だったらだれでもわかるように，高学年の子どもたちと低学年の子どもたちというのは，認知発達からみて，ほぼ別の生物みたいなものですから，高学年用に開発してきた英語活動文化をそのまま中学年に回すわけにはいかない。

でも，ちょっと言い過ぎかもしれないけど，そういう仕打ちを受けても，なおかつ何とかしようというエネルギーには私は感服せざるを得ない。それこそ，これからどのくらいあたまが回る時間が私に残されているかどうかわからないけれども，

子どもたちの母語の力を生かした英語教育を，最後から２番目の方でしたか，質問されたように，できるだけ具体的な形で小学校の先生方に提供して，できるだけの支援をしていくのが，これからの，小学校英語という文脈での私の役割かなと強く感じました。

★司会者

ありがとうございました。こういうシンポジウムを開いて，小学校の教育の文脈の中でという形で議論ができたのではないかなと思います。少し私の不手際で時間がかかってしまいましたし，また，皆さんと議論が余りできなかったこと，大変申し訳なく思いますが，私自身は，今日の４人の方のお話を聞いてとても勉強になったと思います。皆さんもそうじゃないかなと思います。４人の先生方に拍手をお願いいたします（拍手）。

皆様，ありがとうございました（拍手）。

―了―